
遊戯王 G X -お気楽小僧の決闘者生活-

時金 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX - お気楽小僧の決闘者生活 -

【Nコード】

N2048Y

【作者名】

時金 成

【あらすじ】

友人宅に泊まり込みで遊んだ翌日、友人宅の居間で起きた俺……
高峰 勝利は遊戯王の世界にやってきていた。友達もかと思ったら、まさかの俺だけっ!？

持ってこれたのは圏外の携帯に遊戯王のデッキが9つとPSPと財布……あ、家はちゃんとあって良かった。と思ったら、亡くなったはずの両親が生きていた!？

と、よくよく体を確認すればなんか縮んでるし！？ え、高校受験
？ 遊戯王の世界に来たんならやっぱあそこっしょ！

これは決闘者として有名になり親孝行を目指すぽっちゃりとした少年の話。

＋注意＋（前書き）

注意書きです。これは書いた方がいい、これはいらんじゃないか、とご意見がありましたら感想などに書いてください。

検討し、声が多ければ追加・変更・削除します。たまに声がなくとも私が追加した方がいいと判断した場合も増えますが、減ることはありません。

＋注意＋

【シンクロ・エクシーズについて】

原則として 高峰 勝利 ・ 遊城 十代 の敵側のみ。

一口に敵と言っても『TURN - 03』で出たようなキャラもいれば、ただ対戦相手という意味のキャラもあります。

【タグ：オリジナルカード有りについて】

デュエルでは使いません。ただ、日常の会話などで出たりする程度です。

ただし、TF6に出ている。さらにアニメオリジナルカードは使います。あくまで使わないのは作者である私が考えたオリジナルカードのみです。

【時代に合わないカードについて】

基本的にはシンクロ関連とエクシーズ関連は存在しない設定です。

シンクロ・エクシーズ・チューナーとテキストに表記されているカードと、極星・ジャンク・BF・TGなどシンクロに強く関連するカードも同じく。

それ以外の最新のカードは大半が存在している設定です。

TURN・00【目覚めたら異世界に】

クリスマスイヴ……俺、高峰 勝利は友人の家に泊まり掛けで遊びに来ている。互いに彼女なんてものはおらず、男二人だけの寂しいイヴだ。何をしているかと言うと。

「速攻魔法サイクロンを発動。俺から見て一番右のカードを破壊」

「チェーンして呼び声を発動。クリッターを持ってきて呼び声破壊。クリッターの効果で顔を持ってきて、ほれ」

「くわあ、また負けた」

遊戯王カードをやっている。友人は最近新たに組み立てたエグゾデシアデッキを使っていて、俺は連敗している。守りのカードが充実していて攻めきれないでいた。むう、やっぱりあのデッキじゃないと駄目か。

「もう一回！ 今度はこれ使っから」

「ふあ、いや、それ何回目だよ。いい加減こっちは眠くなってきたからもう明日にしろよ」

「くっ、勝ち逃げは許さんからね」

もう午前二時過ぎ。俺もやや眠くなってるから大人しく引き下がる。

「あ、金ちゃん。俺のラビエルと金ちゃんのワイゼル交換してくれない？」

「ラビエルだけじゃなあ……幻銃士付きならいいぞ」

「よし、取引成立！」

こうしてカードを交換するのも金ちゃんだけになった。他の友人達はもうやめてしまって……というよりも疎遠になって久しい。

「そういえば高峰。仕事は見つかったのか？」

「うっ……まだ」

「おいおい、大丈夫か？」

はあ、嫌なこと思い出さないで欲しい。俺は先週仕事をクビになった……今、再就職をしようと面接を受けてはいるが不採用ばかり。くうく、三十路でクビとか……この不景気な世の中じゃかなり痛い。しかも、よりもよって30才になる誕生日にか。

「さて、寝るか。愚痴くらい聞いてやつから元気だせ」

「おゝ、恩に着る。あー、でも遊戯王みたいにカードゲームが仕事にあつたらいいのに」

「確かにいいよな。だが、所詮二次元だ。地道に探すしかないさ。じゃ、電気消すぞ」

友達の金ちゃんが電気を消して、この日は眠りについた。ここでもし、あんなことを言わなかったら……あんなことにならなかったのかもしれない。

チュンチュンと小鳥がさえずる音で目を覚ました俺はむくりと布団から起き上がる。今何時だろ、と携帯を見れば。

「6時か……あれ、圏外？　なんで？」

携帯が何故か圏外になっていて首を捻っていると、ガチャリと部屋にある扉が開いて、そこから金ちゃんが入ってきた。

「あ、おはよ。金ちゃん」

「はよ、高峰。飯は昨日の残りでいいか？」

「うん、もちろん」

携帯の方は後でいいや。今は朝飯を食べることにしよう。冷えてい
るけど、それでも美味しいご飯を食べながらテレビをぼつと見つ
めていると危うく嘔き出しかけるところだった。

「では、次に海馬コーポレーションが主催するイベント情報です」

「は？」

「お、待ってました」

俺はポカんと呆けるが金ちゃんは待ちかねたと目を楽しげに細めな
がらテレビから流れる音を聞き逃さないようにしている。え、ちょ
い待ち。海馬コーポレーションって遊戯王に出てきた会社だろ？

なんでそれが目覚ましテレビで流れてるんだよ。そして、金ちゃん
は不思議に思おうね。というか変なのは俺なのか？ ニュースでは
海馬コーポレーションが主催するイベントについて映像を使いなが
ら紹介しているが、俺は混乱してまともに聞いていない。と、ニュ
ースは次に移った……次はデュエリスト育成学校の受験申し込み期
日が終わるというものだった。

「あゝ、行きたいんだけど受かる自信ないんだよな。高峰は受けるのか？」

「……どうだろうね。就職とか考えたら受けた方が良さげだよな、うん」

「お前のデュエルの成績じゃ、無理だろ。俺と同じくらいだからな」
適当に無難な答えを返していると、金ちゃんの言葉に戸惑った。デュエルの成績って、授業に盛り込まれてるの？ ナチュラルに対応してるけど、マジで遊戯王カードで遊ぶ仕事があるの？ どうしてこうなった？ というか待て。今ニユースでやってたのは高校だぞ。それに成績って……そんなことを考えながらカレンダーに視線を向けると、そこには15年前の西暦が書かれていた。

これだと俺、中学3年生？ そういえば金ちゃんをよく観察すれば若干低い？ もしかしなくても若返ったのか？ いや、金ちゃんはそのまんまなんだろうけど。金ちゃんが違和感を感じてないってことは俺は15才の時の姿に戻ったと考えるのが妥当か。

あゝ、もう訳分からん。それから俺は逃避をするように遊んだ。15年前だったのにWiiでスマブラをやってと。そして、軽くデュエルをした。鞆には30才の俺が使っていたデッキが入っていたが、机には15年前に使っていたデッキが置かれていたのでそっちを使った。

夢の中の金ちゃんのデッキは俺の知っているデッキとは程遠い構成だった。俺の方も似たり寄ったりだったけど、無駄と思うカードを

抜いたらよく回るようになって24戦19勝と勝ち越した。うん、最近負け続けたからなんか嬉しい。

大いに遊んで夕方になったので家に帰宅しようと金ちゃん家の玄関に今はいる。

「まさか高峰に大勝されるとはな。昨日、お前手加減してたのか？」

「うんにゃ、夢見がよかったからその通りにしただけ」

「夢でもデュエルって、お前そこまでがり勉だったっけ？」

カードゲームでがり勉って……。俺は苦笑いしてこの日は誤魔化して帰った。そして、家に帰ると……。

「あ、お帰り馬鹿兄。もうすぐご飯だから」

「ああ、麻弥。できたら呼んで」

「へいへい」

小生意気な妹に出迎えられて、俺はそそくさと勝利の部屋とプレイトがある部屋に入った。そこで俺は鞆を開ける。中からは向こうで確認した通り30才の時に使っていた複数のデッキと微調整用のカード数枚……交換したばかりのワイゼルが入っていた。

シンクロもエクシースもある。いい加減、目を覚ましてもおかしくはないし、帰り道の時に頬を抓ってみたら痛みがあったので現実だろう。というかそう想定して行動しないと社長とかペガサスとかに目を付けられる可能性があるし。

絶対にシンクロとエクシースは使えない。というか、そもそもソリッドビジョンが反応しないだろうし。それにチューナーだったモンスターテキストからチューナーという文字が消えてるから出せないだけだね。まあ、星を揃えて出すエクシースモンスターは召喚できるだろうけど出せた試しがないからな。

それに目を付けられるのは嫌だし、安全に暮らすなら使わない方が吉。俺としては夢落ちを期待したいが、痛みがある時点で無理だろう。どうしてこうなったんだか知らんけど、人生をやり直す有り得ない機会が得られたんだし、今度は仕事をクビにならないように頑張らないと。

出来たら彼女も作りたいな。昔はゲームに睡眠、食欲にかまけてそうだったことに興味無かったから。ああ、でも太ってたら無理だよなあ。いや、高校で一気に2倍に膨れ上がったから、今から努力すれば高3の頃にはきつと痩せてるはず。

よし、目指せスリム勝利……なんか売れない芸人みたいな名前になったな。さて、危なそうなカードを抜いていくつか組み直さんと。ここが遊戯王の世界ならアカデミア行った方が将来役立つだろうし、ドローパンを食べてみたいし。

主人公が居たとしても、どうせ俺はモブなんだから危険はないっしょ。あ、でも俺一期しか見てないんだよな。見た一期すら昔過ぎてるくに覚えてないし……確かE・HERO使いでガツチャって口癖

の奴が主人公だったな。

うし、成績のために徹底研究してあっさり負けないようにしよう。
ただでさえE・HEROデッキは苦手なんだしな。要注意は属性ヒーローだ。他はどうとでもなるし。

色々考えている内にとある問題のデッキに手を伸ばす。確認せずに
なんで問題と分かるかは簡単だ。俺のメインその2で、通称邪神デッキ。
その名の通り三邪神が入っているデッキだ。

邪神を出すことに俺なりに特化させたこのデッキは、まさしく邪神
がエースでありフィニッシャー。邪神が除外されるか墓地に送られ
れば負け確定のギャンブルデッキ。だけど、勝率がまずまずと当初
はネタで作ってすぐバラす予定だったのにいつのまにかメインの一
つになっていた。

金ちゃんから邪神が憑いてるんじゃないかと冗談で言われたことがある。
なんせ、絶対に一度は出るんだもん。たった一度だけ三邪
神がフィールドに出揃ったことすらあるし……ただ、その時はイレ
イザーを狙われて負けちゃったけど。

俺としてはまだまだ使いたいのだが、この世界で三邪神を使うのは
危なすぎる。絶対にペガサスに目を付けられるのは分かり切ってい
るから。うゝ、でもバラしたくはないし……うん、これは手付かず
にして保存しておこう。

デッキケースに丁寧に納めて作業を再開。12個あったデッキは9

つまで減った。だって、しょうがない。減った3つはシンクロ主軸だったからシンクロが使えなかったらパワー不足と硬さ不足で負けるのは目に見えてるし。それにその内の一つは切り札が結束……絵柄的に絶対に使えない。そういえば今更だけど、このデッキにあるカードってソリッドビジョンに映るんだろうか？

そんな最初に気付いて当然の疑問にぶち当たった時、階下から俺を呼ぶ声がした。ご飯が出来上がったのだろう。ひとまず浮かんだ疑問は置いて夕飯食べよう。この問題を解決できるのではないかとで調べないといけないけど。

居間に着いた時に叫ばなかった自分を褒めたい。そこには4年前に亡くなったはずの両親が座って待っていたからだ……いや、15年前だし生きてて当たり前のはず。なんかもう、どうでもいいや。夢だろうとあの時悔いたことをやれるようになったんだ。なら、夢から覚めるのもやることやってからだ。

「……母さん、父さん。俺、デュエル・アカデミアに行きたい」

そして、プロになって温泉旅行を家族で行くんだ。俺はそう心に誓った。

TURN・01【vs試験官】（前書き）

第一回目のデュエルです。間違い、脱字があつたら教えてください

TURN・01【vs試験官】

俺が父さんと母さんにデュエル・アカデミアに入学したいと伝えると凄まじく驚いていた。妹二人にまで驚かれる俺って……。

まあ、理由はすぐ判明したんだがな。驚かれた理由は単純で、学校の俺のデュエル成績は学年最下位……しかも、授業にデュエルモンスターズが導入されてからずっと。妹にすら大連敗中らしい。

まあ、あんなゴテゴテしたバランスの悪いデッキ使えばな……最高攻撃力が1500って。いくらなんでも低すぎだ。金ちゃんのデッキだと出たので1600……どっこいどっこいだった。

俺がまずしなければならぬのは学校の成績を上げること。英語以外壊滅的に忘れてしまっていたけれど、デュエル・アカデミアの入試はデュエルに関する筆記と実技だったので上げるのはデュエルの成績だ。

いきなり強力なカードを入れると不審な目で見られることを想定して、下級戦士のみで構成されたデッキを新たに組んだ。切り札はコマンド・ナイト。キーカードは一族の結束を含む強化カードだ。

この世界だと攻撃力3000を超える数値は驚愕すべき事柄であることを俺は知らなかった。それをデュエルする前に知ることが出来たのは運がいいと言わざるを得ない。テレビで海馬社長とプロデュエリストのデュエルで青眼の白龍が出たときの歓声と言ったら……。

ありがとう、アナウンサー。的確な言葉で助かりました。そのお陰

で俺は強化もほどほどにしようと思って決めて、学校でさっそくデュエルをした。そうしたら平均2400の戦士達による蹂躞劇だった。

あれよあれよと言う間に俺の成績は鰻登りだ。たった三週間で学年次席まで登り詰めた。うん、元の世界だと禁止カードもこの世界なら平然と使えるから回る回る。ちゃんとした場所で強欲な壺を使ったりとかな。

それに良いことがあった。ブラッド・ヴォルスとミノタウルの2枚と原作アニメ効果の天よりの宝札を交換してもらった。もちろん、宝札は2枚だ。学年主席の人と仲良くなって獣戦士系でいいカードがないかと聞いてきたので、その2枚を見せたら欲しいと即決。

交換したら宝札2枚だったのは驚いた。俺が交換したカードはどちらも星4のノーマルモンスター。しかし、この世界なら一線級の攻撃力持ちだ。しかも、しかも、その主席曰わくこの2枚は海馬社長が使ったことがあるカードとして一枚20万円で取引されてるらしい。

宝札は一枚15万なので彼、松山君は申し訳なさそうにしていた。まあ、大切に使うってくれるならと言って笑うところちが戸惑うくらい感激していた。

うん、人を感激させるなんて元の世界じゃ不可能だったな。実態は三十路の誕生日に仕事クビになったマダオだしなあ、俺。

まあ、この世界だとデュエルが強ければマダオなんて呼ばれないだろうし、目的のために勝って勝って勝ちまくってやる。日々、デュエルをしていてわかったことだが、デュエルのレベルが全体的に低い。だから俺くらいの戦術でも無双が出来る。

松山君みたいな例外もいるにはいるが、同学年の生徒は大したこと
はなかった。ただ、松山君にはいいところでいつも負けている。コ
マンドナイトでロックして攻撃したらサイクロンで一族の結束を破
壊された上に収縮されてロックを外されたり、野生解放使って真っ
向から叩き潰されたり……わざとモンスターを揃えさせられて激流
葬で一氣に流され。

もう、ほんと罨と魔法の扱いが巧いったらない。さすがは学年主席
で満橋中学最強だ。偽装用デッキじゃなくて俺お気に入りのデッキ
で早く戦いたい。早くアカデミアの受験日来ないかな。と、そうだ
そうだ。忘れるところだった。

俺が親孝行をしようと誓った翌日、部屋を漁っていると鍵を見つけ
て部屋に何故かあった鍵付きの戸棚を開けた。そうしたら中には見
慣れないデッキが複数あって中を確認してみたら、かなりのレアカ
ードが大量に……ゲームの中でしか組んだことのないバーンデッキ
やE・HEROデッキなどがあった。

そこでようやくこの世界に持ち込んだ荷物を確認をした。そこでシ
ョックなことが……PSPに差したままだったはずのゲームソフト
が消えていた。差してあったのは遊戯王のゲーム……最新作のTF
6だ。

高かったのに……しかし、そこで見つけたデッキを思い出して、全
部確認すると時械神のデッキを見つけてとある可能性に行き当たっ
た。ゲームの中で組んだデッキが実体化したからソフトが消えた、
と。そんなバカなと一笑できる考えだが、遊戯王の世界に来たこと
を思えば安易に否定するのは無理だ。

まあ、このデッキの数々は有効利用するつもりだ。もっとも非公式デュエル限定だが。

そんなこんなでアカデミアの入試の日が近付いてきたある日、俺は松山君からデュエルディスクを借りることが出来た。今は自分の部屋で装着している。なんで自分家で付けているかは簡単。

ソリッドビジョンの投影比率を小さくして、持っているカードがちゃんと反応するか確認するためだ。ただ、邪神が反応すればみんな反応するだろうからさっさと特にお気に入りのアバターとドレッドをディスクにセットした。

投影オンリーだから生贄はいらない。そうしたら小さくアバターとドレッドが無事投射された。ああ、これで安心して試験に臨める。今まで中学での授業だと生徒全員が出来るように机をくっつけて紙のシートでやっていたから今の今まで確認できなかったんだよな。

それにしても良い仕事をしているな、海馬社長は。アバターがちゃんとドレッドの姿に変わってるよ。くっ、公式デュエルで使えないのが悔やまれる。まあ、出せるかは微妙と言わざるを得ないが。

そうして借りたデュエルディスクを松山君に返すと、とうとう入試の日になった。まずは筆記で、翌日に実技という予定になっている。筆記に関しては分からない問題もあったが、手応えはあった。

そして、翌日。俺はワクワクして眠れず、試験会場である海馬ランドに受験生で一番に入場した。そこで渡されたのは31番のプレート……つまり筆記試験の成績は31番目というわけだ。まあまあだ

な。実技でミスをしなければ十分に良いスタートを切れる。

この日のために試験用のデッキを組んだんだ。実技はトップで通過してやる……圧勝すれば確実に入学できるだろう。試験用はそれが可能だ……多分。

ふあ、早く来すぎて暇だ。それにあんまり寝てないから眠くて仕方がない。携帯のアラームを試験が始まる20分前にセットして……うん、これなら2時間は眠れる。よし、おやすみなさ〜い。

「い おい、たかみ おいつ！」

「んあっ？」

寝ていた俺は起こされた。誰であろう友人の金ちゃんに……ちなみに金多 剛が本名だ。略して金ちゃんて、小学校からこのあだ名は変わらない。なんか焦ってるけ……て、あれ？俺はがばっと起き上がり、携帯の画面を見る。そうしたらもうすでに試験が始まっている時間を大幅に過ぎていた。

「あ、あの金ちゃん。俺って不合格？」

「あともう少しでな。ほれ、さっさと行ってこい」

多分、試験用のデュエルディスクを受け取り、俺は慌てて鞆からデ
ツキを取り出してセットした。そして、金ちゃんに礼を言って試験
官が待つ壇上に上がる。

「デツキ調整で徹夜したのかい？」

「えっと、はい。絶対に合格したかったので……」

「はっはっはっは、そのやる気は花丸をあげよう。だが、体調管理
もデュエリストの前に人として当たり前だからな。今後は気をつけ
るように」

「はい」

気安く朗らかな男性試験官でよかったと思う。うん、寝過ごして不
合格にならないみたいでよかった。

「それじゃ時間も押してるし、さっそくやろうか」

「お願いします」

お互いにデュエルディスクを構える。そして……。

『デュエルっ!』

互いに開始の合図を高らかに宣言する。

「先行は君からだよ」

「はい、ドロー!」

あれ? スネーク・レインが2枚にエーリアン・リベンジャー、エーリアン・マザーと宇宙獣ガンギル……あ、エーリアン・グレイがある。って、ちよつと待て。

デッキ間違えたあつ!? これエーリアン主軸のC c a r a y h u^{コカライ}
a^アデッキじゃないか! 試験用に組んだのは剣闘獣のデッキなのに……あ、慌てて取り違えたよ。しかも、初手がかなり悪いし……グレイしか出せないじゃないか。

うう、合格最低ラインに達せれるように足掻いてやる。まずは……。

「手札から通常魔法、スネーク・レインを手札のエーリアン・マザーを捨てて発動します。このカードはデッキから爬虫類族モンスターを4枚墓地に落とします。落とすのはエーリアン・リベンジャーとエーリアン・ヒュプノ2枚とエーリアン・テレパス」

「ん？ そんなデメリットカードを使って何がしたいんだい？」

「ただの墓地肥やしですよ。さらにもう1枚、スネーク・レインを手札の宇宙獣ガンギルを捨てて発動。エーリアン・テレパスにエーリアン・ハンター2枚、エーリアン・キッズを墓地に落とします。最後にモンスターをセットしてターンを終了します」

これで10枚爬虫類が墓地に落ちた。8枚も圧縮出来たから……あと27枚か。せめて試験官が大物を出す前にリベンジャーを出す準備整えないと。グレイじゃなくてウォリアーの方がよかった。

「では、私のターンだ。ドロー。私は手札からモンスター効果を発動。手札からサンダー・ドラゴンを捨てる事でデッキから別のサンダー・ドラゴンを2枚まで手札に加える事が出来る」

このパターンは……融合来るか？ ライフが4000で双頭の雷龍サンダー・ドラゴンはキツいってモンじゃない。今日は厄日なのか？

「サンダー・ドラゴン2枚手札に加え……私はRAI-MEIを攻撃表示で召喚」

黄色い稲妻模様が入った紫色の全身スーツを着た美少女が実体化する。確かこのモンスターって戦闘破壊で発動するサーチモンスター

か。攻撃力も1400と高めだ。

「バトル！ R A I - M E Iでモンスターに攻撃！ ライトニング・キック！」

R A I - M E Iが稲妻を纏った跳び蹴りでリバースして姿を現したグレイを豪快に蹴り飛ばした。

「リバース効果発動！ リバースした時、相手フィールド上の表側表示で存在するモンスターにAカウンターを一つ乗せる！」

グレイが飛ばされながら緑色の液体をR A I - M E Iに吐き付けると砕け散った……うわ、グロっ！？ なんか周りから女の子の悲鳴が聞こえたが、無視だ。

「さらにリバースしたエーリアン・グレイが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから1枚ドローする！」

引いたのは……またグレイかよ！

「ふむ。私は2枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

エーリアン・ブレインか……まだマシだな。

「俺はモンスターをセットし、1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー！ 私はRAI-MEIを生贄に充電池メンを攻撃表示で召喚！ 充電池メンの効果発動！ このカードが召喚に成功した時、手札またはデッキから充電池メン以外の電池メンと名の付いたモンスター1体を特殊召喚することができる。私はデッキから電池メン・単三型を攻撃表示で特殊召喚！」

せつかく乗ったAカウンターが……しかも、電池メンデッキかよ。裏側セットでよかったかもしれん。電池メンデッキの常套手段は単三型を特殊召喚して地獄の暴走召喚で一気に揃える戦法だ。電池メン・単三型の効果は……。

「電池メン・単三型の効果、このカードと同じ名前のモンスターがすべて攻撃表示だった場合、1体につき1000ポイントアップする。守備表示だった場合は守備力が1000ポイントアップだ。さらに充電池メンの効果、このカードの攻撃力・守備力は自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンスターの数×300ポイントアップする。充電池メンを合わせて2体……よって600ポイントアップ」

3体揃えれば攻撃力が3000……ライフが8000有っても耐え

きるのは難しい。ただ、地獄の暴走召喚を使うには相手側……つまり俺のフィールドに表側表示のモンスターがいなければならない。グレイはセットで出したから発動条件を満たさなかったわけだ。そもそも手札にあるかは怪しいけど、あると仮定して行動した方がいい。

「バトル。私は電池メン・単三型で伏せカードを攻撃！ スパーク・エンド！」

「リバーズ！ 俺は充電電池メンにAカウンターを乗せる！ さらにエーリアン・グレイが破壊された時、罠カードエーリアン・ブレインを発動。このカードは自分フィールド上に存在する爬虫類族モンスターが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地に送られた時に発動することができる。その時に攻撃を行ったモンスターのコントロールを得て、そのモンスターを爬虫類族として扱う」

「なにっ!？」

「そして、エーリアン・グレイの効果でドロー！」

これで単三型の分は下がった。それでも充電電池メンの攻撃力は2100。単三型の分を引いて1100のダメージが。

「ならば充電地メンで電池メン・単三型を攻撃！ チャージ・シヨットー！」

「くっ……!？」

おお、爆風が起きた。リアルだなあ……って、んなわけあるかい。
これ立体映像だよな？　なんで爆風が起きるんだよ。でも、周りは
気にしてないし問題はないのか？　ないんだろうな。そよ風程度だ
から今後は無視だ。

これで俺のライフは残り2900になった。双頭の雷龍サンダー・ドラゴンの攻撃1発
は耐えられるが、充電地メンの存在で双頭の雷龍が融合召喚され
ら詰む。試験官の手札は4枚、その内2枚がサンダー・ドラゴンと
しても残り2枚に融合は無いんだろう。

그레이の効果で引いたのは大嵐だったし……本格的にヤバいぞ。ま
あ、これを使って伏せてあるカードを破壊しないとな。

「私はそのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

「このままだと充電地メンで押し切られてしまうぞ」

確かにこのままだったら負けるな。手札のモンスターは星6のリベ
ンジャー1枚。それと大嵐に……強欲な壺！

「俺は大嵐を発動！」

「なっ、私のミラーフォースと暴走召喚が!?!」

あ、危な過ぎだろ。カウンタートラップ警戒して発動してよかった。

「さらに手札から強欲な壺を発動して2枚ドロー！」

まだギリギリか？ 俺が引いたのはスネーク・レインと細胞爆破ウィルスだ。

「俺はカード1枚を伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー！ 私はライオウを攻撃表示で召喚！ これが通ればお終いだよ。バトル、私は充電池メン、ライオウでダイレクトアタック！」

よし！

「充電池メンの攻撃宣言にリバーズカード発動！ 細胞爆破ウィルス！ このカードはAカウンターが乗ったモンスターの攻撃宣言時に発動することができる！ 相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターをすべて破壊する！」

「なんだってっ!？」

これでなんとか凌いだ。でも、まだまだ危機は脱してない。手札には召喚できるモンスターはいないからな……何が何でも引いてダメージ与えないと。

「くっ、ならば私は500ポイントライフを払って手札から充電器を発動する。墓地から電池メンと名のついたモンスター1体を特殊召喚する。私は充電池メンを特殊召喚してターンエンド」

なっ、クソ。充電池メンの攻撃力を超える下級モンスターなんていないぞ!?

「……俺のターン、ドロー！ くっ、俺はモンスターをセットしてターンエンド」

引いたのはエーリアン・ウォリアーだった。攻撃力は1800と充電池メンの元々の攻撃力と同じだが、300ポイントアップしてるから勝てない。

「私のターン、ドロー！ ふっ、ようやく来たか」

嬉しそうに引いたカードを見る試験官に俺は嫌な汗を掻く。ここで喜ぶカードなんて1枚しかない。

「私は手札から融合を発動！」

そう融合だ。恐らくあのデッキのエースモンスターの登場だ。

「手札のサンダー・ドラゴン2体を融合！ 招来せよ、サンダー・ドラゴン双頭の雷龍！」

攻撃力2800の雷族の融合モンスター。サンダー・ドラゴン1枚と融合が手札にあればすぐにでも出せるお手軽な上に強力……蘇生制限もないから蘇生も容易だ。

「バトル。充電池メンで伏せカードに攻撃！」

「エーリアン・ウォリアーの効果発動！ このカードを戦闘によって破壊したモンスターにAカウンターを2つ乗せる！」

「サンダー・ドラゴン双頭の雷龍でダイレクトアタック！ サンダー・ホーン！」

ぐっ、軽い衝撃が。残りライフはたったの100……双頭を倒せるモンスターは1匹だけ。3詰みしてるはずなんだけどなあ。

「私のターンはエンドだ。次のターンで私の勝ちだ」

「うう、ドロー」

引いたのは……。

「よっしゃあつ！」

「お、いいカードでも引けたのかな？　だが、サンダー・ドラゴン双頭の雷龍を超えるのは難しいぞ」

引いたのは地縛神とは別の切り札。しかも、今の状況で出せば神にすら勝てる。つと、念には念を……。

「俺はエーリアン・リベンジャーを捨ててスネーク・レインを発動！　デッキから爬虫類族モンスターを4枚適当に墓地に送る！」

「む？」

「このターンで終わりだ！　俺は手札から邪龍アナンタを特殊召喚！　この時、自分のフィールド上と墓地に存在するすべての爬虫類族モンスターを除外する！」

除外された爬虫類族モンスターの数は……18枚！

「邪龍アナンタの攻撃力と守備力は特殊召喚時に除外した爬虫類族モンスターの数×600ポイントになる。除外した数は18体……

よって邪龍アナンタの攻撃力は10800!」

「10800だって!?!」

「バトルだ! 俺は邪龍アナンタで双頭の雷龍サントー・ドラゴンを攻撃! インフィニット・エクスキューション!」

「ぐ、くううう……」

邪龍アナンタは6つ首の龍だ。そのすべてから黒い奔流が吐き出され双頭の雷龍サントー・ドラゴンを飲み込む。占めて8000のバトルダメージだ。このデッキの切り札中の切り札。

このデッキは本来、エーリアンで殴りながら地縛神Ccaryhアuaを召喚して攻める。Ccaryhuaが倒され墓地が肥えてきたら邪龍アナンタを召喚して勝ちを奪いにいく。そんなコンセプトだから、今回みたいにとこん手が悪いと簡単に追い詰められてしまう。

まあ、今回みたいな悪さは滅多にないんだけどな。いや、まったく……焦るわ。

「ふう、試験終了だよ。まさかあの状況で逆転されるなんてビックリしたよ。結果は後日通達するからね」

「はい、ありがとうございました!」

俺は礼をして壇上を降りる。試験が終わった者は自主帰宅していいということなので俺はさっさと帰ろうと思う。ゆっくりと寝るのだ。金ちゃんに起こしてくれたことに改めて礼をしてから俺は試験会場を出る。その時に……。

「ヤバイヤバイ、遅刻だぁ!？」

茶色い髪のおかつば頭に近い髪型の少年が焦りながら俺が来た道を走り去っていった。うん？ あっちは入試で貸切状態なんだけど、まさか入試に遅刻したのか？

始まる前に寝て、寝過ごした俺が言えた義理じゃないけど大丈夫だろうか、あの子は。まあ、俺が気にしたって仕方がない。よし、今日は寝るぞー！

TURN - 01【VS試験官】（後書き）

ちなみに主人公の名前 高峰 勝利 は たかみね まさとし と
読めます。

TURN・02【アカデミアで出来た友達 前編】（前書き）

前回の第2話を前編後編に分けました。前編は全然変わってませんが、後編は加筆修正したデュエルシーンです。

今回使うデッキがオリ主『高峰 勝利』の一番信頼し頼りにしているデッキです。

TURN・02【アカデミアで出来た友達 前編】

合格通知が来た。それからは大変だったな。家族は大いに驚いて豪勢な夕食だったり、妹2人に見直したと言われたり。

ただ、残念なのは金ちゃんが落ちてしまったことだ。知識が足りず、実技で有効な手を打てずに負けてしまったらしい。俺が渡したカードも引けなかったと言っていた。

だけど一浪して来年再受験するらしい。今まで学年最下位だった俺が合格したことで、1年勉強し直せば自分も合格できるだろうと考えたらしい。どうしてそんな考えになったか素直に聞けば、俺が隠れて勉強を頑張っていたらうと言われた。

いや、まあ、学年最下位から次席に登りつめた時に一部生徒とある教師に八百長の嫌疑かけられるほど急だったんだけどな。それを指摘すればカードが足りなかったから今まで伸びず、急に伸びたのはカードが集まって努力が実ったから。

そもそも俺の性格上、八百長なんてしないときっぱり断言した金ちゃんに俺は嬉しくなった。確かにあのデッキ、かなりカード不足だったからな。直接排除系の罫なんて入ってないくせに60枚……ほとんどが一時凌ぎしか出来ず、回りくどい排除系ばかりか。

最高攻撃力が1500でポールポジションって意味なしだと思ったらサイクロンが2積みしてあったから、ポールポジションで1500以上のモンスターを破壊するつもりだったんだろっね。

あつちでも俺を氣遣つてくれた先生はこつちでも同じだった。俺が次席になった時は大層喜び、アカデミアの入試合合格を聞いた時は俺の肩を叩いて喜びを表していた。ちなみに松山君も合格している。

俺が渡したブラッド・ヴォルスが決め手になったらしい。それを引いて決め手にまで導いたのは松山君の実力なのに、感謝されるのはかなり違和感があった。でも、まあ、感謝されるのは悪い気分じゃない。

それで色々と準備をしてアカデミアに向かう日になった。俺は船に揺れ揺れながら今はおむすび片手に海を眺めている。ヘリコプターか船かの選択式だったが、のんびり行きたかったので船を選択した。なのでヘリ組よりもちょっと早めの出発だ。

船での食事はバイキング形式で、お持ち帰り用におにぎりまである。今食べてるのもそれだ。うん、和むわあ。なんて至福、なんて贅沢塩加減も抜群に美味いおにぎりを食べながら大海原を見渡せるなんて……なんて幸せ者なんだ、俺は。この景色とこのおにぎりなら、何個でも食えるぞ。

あ、いかんいかん。痩せるって決めたばかりなのに……明日から頑張ろう、うん。そうして優雅な船旅を3日も満喫して俺はデュエルアカデミアに到着した。これぞ大自然と言えるような島だ。

食べ物の輸送代とかバカにならないだろうなあ。それにしても電気は通ってるのかな？ この世界にもPSPがちゃんとあったからモンハンやりたいんだけど、充電できないとあつと言う間に遊べなくなるから、通ってなきゃ困る。

つと、ヘリ組も到着したみたいだな。大型のヘリが船が停まってる港から見えるヘリポートに向かつていった。遅刻したらしゃれにならないし、校舎に向かうかな。俺は旅行用のキャリーバッグを引きながら校舎に向かった。

校長先生の長い話が終わり、俺は自分の寮にやってきた。一人一部屋あるらしく、とっても大きく立派な建物だった。ちなみに俺はラニーエローだ。昔、テレビの特集で見た軽井沢の別荘みたいで、今夜の歓迎会がとても楽しみになる。

それと学校からデュエルディスクをもらったからこれからはいつでも立体映像でデュエルができる。これ、買おうとすると高かったんだよね。バトルシテイの参加者はタダで手に入れたみたいだけど。安くて2万、高くて6万……さすがに買ってくれなんて言えないよ。

つと、ようやく着いた。俺は自室に着くと部屋に入り、事前に送っておいた荷物を開ける。その中には小さな金庫が入っていた。これは俺が持ち込んだ財布の中にあつたお金を使い買った……全部使い切っても小さな物しか買えなかつたが、これはダイヤルに加えて鍵も付いてる二重ロック式。鍵には紐を付けて落とさないように肌身離さず持ち歩く予定だ。

金庫の中にしまうカードは邪神を含んだこの世界ではレア中のレアな物だ。三幻魔も金庫の中……パソコンで調べた限り、D・HERO、宝玉獣、アルカナ、サイバー系など、この世界だと特定人物しか持つていないと広く知られているカードをしまっている。こんなの見られたらどうなるか分からないからな……なら、持つてくるなど言われそうだが、家に置いてると母さんか妹に発見される可能性があるから仕方がない。

まあ、E・HEROは主人公以外にもプロに使い手がいるし、比較的簡単に入手できるから金庫にしまう必要はない。ただ、学園には主人公一人だけだったはずだから見分けは付くだろう。ただ、テレビだと融合体は3体しか見たことがないんだよね。フレイム、サンダー、テンペスターの3体……下級も基本の8体のみ。

ヒートやエアーマンは見たことないんだよね。属性HEROも。この世界に無いんだろうか？ さすがに調べきれなかつたから確認のしようもないし……ただ、この世界のカードは色々とかオスだった。

野球の遊戯王カードがあったり、テニスの遊戯王カードもある。将棋の遊戯王カードまであったのは驚いた。やっぱり希望とかアンケート取ったりして新しく作ったりしてるんだろ。うな。そういえば魚族限定のコントロール奪取カードで“一本釣り”なんてのもあった。

使うとしても相手が限られてる、と思ったが自分の墓地から蘇生もできる効果があり速攻魔法だから魚族版の結界通路みたいなものだった。それにプラスして相手フィールドに存在する魚族モンスター1体のコントロールを奪う効果に、墓地蘇生は相手の墓地も効果範囲とけっこう強力だ。

でも、俺は魚族を使わないから強力でも宝の持ち腐れになる。それに高いし……1枚4万と書かれてたのには心底驚いた。まあ、魚族デッキには必須の蘇生カードだからかもしれない。そんなことをつらつらと考えている間に俺は金庫の中に邪神デッキと各種カードを丁寧にしまい、金庫はクローゼットの中に置いた。ちなみに金庫の扉は壁に向けて、その上に布を敷いて隠してから畳んだ服を乗せるカモフラージュも万全。

結構重いから盗む前提で、場所を知ってないとまず触らないだろう。暗証番号も入試の時に乗った電車についていたプレートの番号だし、誰もわかるまい。適当に回して当たっても鍵が無ければそもそも開かないし。服もしまったし、一番のお気に入りデッキも母さんに買って貰ったケース付きジャケットに入れたし……そのジャケットの上から大きめに注文したライエローの制服を羽織ってつと。

今日1日はもう歓迎会くらいだから時間になるまで暇を潰してこよ。となれば学校探検だな。学校からもらった生徒手帳代わりの端末PDAがあれば迷わないだろう。通信機能ありメール機能あり地図機能ありとかなり高性能な代物だ。準備はOK、よし。

さて、探検だ！

そう意気込んで出たはいいものの、数十分後……。

「じじ、どじ？」

思い切り迷っていた。PDAは操作が分からず適当に弄って……今は画面にエラーと出てしまっている。直し方なんてわかるはずもなく、とにかく人に聞くべく歩き回っていた。そしたらどんどん意味が分からなくなって、人にも会えずに呆然としてるわけだ。

「あはははははは！」

「ん？ 向こうから声がする。やっと帰れるかも！」

近くの扉から聞こえる笑い声に俺は安堵と同時にテンションが上がる。いい加減足が痛くなってきたけどイエロー寮に帰れるとわかって俺は声ができる方に走り出し、赤と青の制服が見えたところで声を張り上げた。

「ビーク「すみません！」

なんか声が聞こえたけど、多分気のせいだ。

「な、なんだお前は。大きな声を出しやがって」

「あ、この人は……」

「翔、知ってるのか？」

なんかオシリスレッドの方は2人で話し始めちゃったからオベリス
クブルーの2人に聞くか。

「ちょっと道に迷っちゃって。ここからイエロー寮に戻るにはどうすりゃいいかな？」

「はあ？ そんなのPDA見りゃいいだろうが」

「いや、エラーになって何がなにやら」

俺がPDAの画面を見せて教えてくれるように軽く頭を下げながら頼んだのだけど。

「オレ達オベリスクブルーが半端者の寮など知るわけがないだろう。他を当たれ」

「む、知らないのか」

知らないなら仕方がない。けど、態度がな。こっちは頭を下げて頼んだのに雑に対応されてムカツとする。

「なあなあ、俺達が案内してもいいぞ！ その代わり俺とデュエルしてくれよ」

「へ？」

俺がオベリスクブルーの2人にムカムカしているとオシリスレックスのおかつぱ頭の方に声をかけられた。

「ほんと？」

「マジマジ。代わりに俺とデュエルしてくれればな」

「それくらいだったらお安いご用だ。地図が読める人に会えてよかった」

「おい、それはどういう意味だ！」

「え、イエロー寮知らないんでしょ？」

俺の言葉にメガネをかけた方のブルーが食ってかかってきた。結構ムカついたから意趣返しもかねて言ったけど、こつも食いつきがいいのか。PDAには地図が出るって説明書には書いてあったから知らないってことは読めないって解釈したただけだね。

確か入学案内にはブルーは中学での成績優秀者用のクラスだって書いてあったから、癪に障ったんだろうね。金ちゃんからはブルーはプライドが妙に高いのが多いから気をつけると言われてたけど、こ

の分だと本当みたいだな。

「貴様、オレの言葉を遮るだけじゃなくなんだその態度は！」

つと色々考えていると客席部分に立っている……なんか漫画の主人公みたいな髪型の人物が俺を見下ろしていた。もしかしてGX主人公か？ にはしてはなんか、物語最初に出てくるかませなエリートっぽいんだけど。

「えっと、どなた？」

「な、なんだと！？」

え、どこに驚愕する部分があったんだ？ 大げさに驚く少年に俺は首を傾げる。

「外部入学者はとことん無知だな。この方は中等部からの生え抜きのエリート。中等部クラスのナンバー1」

「未来のデュエルキングの呼び声高い、万丈目準様だ」

「ふうん」

いや、アカデミアの中等部で有名なのはわかったけど。他校の順位なんて知るわけないんじゃないか？ それに未来のデュエルキングって、まあ、夢は大きくだね。

「将来の夢は大きいに越したことないからね」

うんうん、頷いているとなんかブルー生徒2人と万丈目という少年の纏う空気がやや怖い。あれ、何か怒らすこと言ったかな？

「大した自信だな。さすがは入試でまぐれにも8000のオーバーキルをしただけはある」

「あ、えっと、そりやどうも？」

んん？　なんか急に褒められた……なんで？　唐突に褒められ困惑している……。

「こんなところで何をしている。翔」

「……翔壱さん」

丸メガネをかけたオシリスレッドの少年が俯きながら、声を掛けてきた少年に返事をした。声を掛けてきた少年はオシリスレッドの翔と呼ばれた少年と瓜二つ……違うのはメガネがない事と目つきがキツいところか。ここまで似てる上に兄と呼んだって事は双子か。つと着てる制服は青。つまりオベリスクブルーか。

「ここはお前みたいな雑魚が来るべき場所じゃないさつさとボロ小屋に帰るんだな」

うん、第一印象は最悪。こんなのは仲良くできそうもないし、こんなのが兄だなんて翔君には同情するよ。

「誰だ、お前。翔の兄貴みただけと言って良いこと悪いことがあるぞ。翔に謝れ」

「……兄貴」

「貴様は遊城十代か。この我がオレが雑魚に頭を下げるわけないだろうが。同じ学校に通っているだけでも虫唾が走るんだからな」

「うわあ、駄目だ。こいつ、性格が悪すぎる。万丈目と他2名も顔をしかめてるのを見ると、オベリスクブルーでも浮いてるんだろっな。まあ、そんなことよりも。」

「あなた達なにしてるの」

「さっさとこの場を退散しよう」と会話に割り込もうとしたが無理だった。黄色に近い茶色の長い髪の女の子が腕を組みながらやってきた。翔の兄のブルーはその女の子が出てくるとニヤリと笑う。

「わあ、綺麗な人……」

「明日香じゃないか。我のモノになる気になったのか？」

「お断りよ。冗談でも言っただけで良いことと悪いことがあるわよ」

なんだろう。顔を赤くしている翔と、目が完全に胸にいつている翔の兄……やっぱり兄弟だから反応が似たり寄ったりなのか。ていうか迷って腹が減ってるから帰りたいんだけど……そろそろだろうし。

「冗談ではない、本気だ」

「嫌よ。私にだって選ぶ権利があるわ」

「丸藤っ！ 天上院君が嫌がっているだろう。やめたまへ」

おお、万丈目が満を持して止めに入った。うん、俺から見ても女の子は嫌がってたしな。

「ふん、雑魚その2は黙っている。貴様に我に意見する権利はない」

「くっ、なんだとおっ!？」

「我に負け続けているだろうが。それがオベリスクブルーのトップ？ 笑わせてくれる。明日香にふさわしいのはこの我だ」

こういうのをナルシストって言うんだろうか。本物なんて初めて見

たよ。まあ、デュエルが強ければたいていは見逃される世界みたいだし、こういうのが居ても不思議じゃないのか？ あの女の子には悪いけど、もう限界。

「なあ、あんなのはどうでもいいから、そろそろ頼みたいんだけど……」

「今、なんと言った黄色い雑魚が」

「腹減ってもう限界なんだが、十代で良かったか？」

「お、おう」

なんかナルシーが話しかけてきたけど無視。あんなのと話してたら時間の無駄になる。話しかけた十代が戸惑いながらも腹を鳴らす俺を見て苦笑いを浮かべた。

「そのあなたの言う通りね。それにそろそろ歓迎会が始まる時間よ。だから私は行くわ」

「明日香、まだ話は終わってないぞ！」

「私にはないわ」

そう言って女の子はさっさと行ってしまった……しかも、冷たくあしらわれてやんの。さて、俺も十代に案内してもらって帰るか。

「貴様っ！？ 余計なことを……雑魚の分際で！」

「十代、頼むな」

「おうよ！ 約束忘れるなよ」

「まあ、デュエルはまた今度な。もうすぐ歓迎会があるから時間ないし……なによりも腹が減ったからな」

何か言ってるが、答えると間に合わなくなるから無視しよう。十代ももう興味を失ったのか帰る気満々だ。翔はあわあわしているけど。

「オレ達も行くぞ」

「あ、はい。万丈目さん」

万丈目達もさっさと立ち去ったし、俺達も行こうか。十代が走り出

してしまったので俺と翔は慌てて追っていく……ちょ、速い！俺、
太ってるから足遅いんだよね！？

あ、こら。翔まで置いてくな！案内してくれるんだろ！

無事に十代に案内されて帰ったイエロー寮での歓迎会で俺は大いに
楽しんだ。十代と翔という新たな友人も見つけたし、今度レッド
寮でデュエルする約束もしたし、楽しくなるぞ。

そうワクワクしながらメインデッキを調整していると、イエロー寮
を管理する先生に直してもらったPDAが鳴った。

「誰だ？」

映像付きメールみたいだったため再生してみると、映っていたのは
あのナルシーだった。翔の兄、丸藤翔吉だった。

『今晚、我達が出会った場所にて待つ。貴様の身の程というものを思い知らせてやる。臆せば来なくとも代わりに別の奴のデッキが無くなるだけだな』

なんだろうか。凄まじくム力つく顔で笑ってるし、しかも、なんか物語で出てくる類の人質を取る悪役なこと言っとるし。うう、校則で夜歩くなって書かれてるから行きたくないんだが……俺とは別の人が被害に遭ってるかもしれない。それは寝覚めが悪すぎる。

「行く、しかないか」

デッキは……メインだな。向こうでもよく使って、金ちゃんのエクゾディアデッキに唯一対抗できたデッキ。さらにF・G・Dが3体、究極竜騎士が2体揃った場を全滅させた唯一のデッキ……あの時はもう駄目かと思ったな。

このデッキなら基本的にどんなデッキにも対応は可能だろう。弱点もはつきりしてるけど、それさえ当たらなければ大丈夫だ。さて、ちやっちゃんか終わらせて帰って寝よ。

この世界のデュエリストでこのデッキの弱点を使う人なんて滅多に

いないだろうしな。というかいるんだろうか？ かなり特殊だし。つと、こっそり行かないとな。抜き足差し足千鳥足つと……あれ、なんか違うような？ まあ、いいか。

先生に教わった通りにPDAを操作して地図を表示してナルシー翔と遭った場所、オベリスク専用のデュエル場だったな。やや足取りは遅いもののなんとかデュエル場に着くと……。

「あつはつはつは！ 遊城十代。雑魚その2を倒した程度で我に勝てるとは思い上がりも甚だしい。貴様のデッキはアンティの取り決め通りに貰うぞ」

十代が膝を屈して、十代のらしきデッキを持って高笑いしている翔の姿があった。

「あ、兄貴い」

「ん、遅かったじゃないか。高峰勝利」

「勝利じゃない、勝利だ。これはどういふ……」

「伝えておいたはずだ。貴様が来なければ他の奴が代わりになると……それが遊城十代だったというわけだ」

俺が来る短時間で、か。近くには万丈目がいるが、ヤツの言葉から万丈目は十代に負けたいらしい。仮にもブルートップのエリートと呼ばれる万丈目に勝った十代が負けるとは……。

「さて、ここに来たということは我にデッキを差し出す覚悟ができたということだな」

「そんな覚悟なんてしてないよ。で、呼んだってことは」

「デュエルだ。貴様のデッキを賭けたアンティデュエルだ」

ということとは十代はアンティを受けたってことか。ここで俺がやることは決まったかな、逃げられそうにないし。それに、アカデミアで初めての友達だし、十代とは今度デュエルする約束してるんだ。それなのにデッキが盗られちゃ出来ないしな。

「なら、お前は十代のデッキを賭ける！ 取り返してやる」

「ハッ、我が負けるはずもないがよからう。貴様には先ほど得た遊城十代のデッキを賭けてやろう」

態度がデカすぎる。アイツ……丸藤翔吉のデッキの中身は知らないけど、メインを持ってきてよかった。

『デュエルっ！』

互いにデュエルディスクを構えて叫ぶ。絶対に十代のデッキを取り返してやる！

TURN・03【アカデミアで出来た友達 後編】

『デュエルっ！』

今日知り合ったばかりの勝利君が翔壱兄さんと向かい合ってデュエルを始めた。翔壱兄さんは見たことも聞いたこともないモンスターと召喚方法で兄貴を倒しちゃった。僕だけが知らないなら勉強不足だと思えるっすけど、同じく今日知り合った明日香さんも知らないみたいだった。

「大丈夫かしらね、あの子」

「ああ。あの白いドラゴンを出されたら危ないだろうな」

「兄貴とのデュエルで出てきたモンスターっすね」

兄貴と明日香さんが勝利君を心配そうに見ている。僕は正直言っただけで翔壱兄さんに勝てるとは思えないよ。兄貴が手も足も出なかったから。

「まずは私のターン、ドロー！」

先行は翔壱兄さんからみたいだ。無茶でもお願いっス、兄貴のデッキを取り返して欲しいっス。頑張れ、勝利君！

「我は……手札からレベル・ステイラーを捨てクイック・シンクロンを特殊召喚する！」

「なんだってっ！？」

丸藤翔壱の行動にあの子が驚いている。手札を捨てて特殊召喚するモンスターくらいで驚くなんて、ライエローとは思えないわね。いえ、何か引つかかる。何に引つかかっているのか分からずモヤモヤとした気持ちになるけど、デュエルはそんな私を置いてどんどん進んでいく。

「そして墓地のレベル・ステイラーの効果。フィールドのクイック・シンクロンのレベルを1つ下げて墓地から特殊召喚！ レベル

1のレベル・ステイラーにレベル4のクイック・シンクロンでチユーニング！」

来たわね。十代とのデュエルで出てきたシンクロモンスター。1ターン目から来るなんて……十代とのデュエルだとそれなりのターンが経過してからだったのに。あの子も運が無いわね。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

飛行機のエンジンのような物を背負った青い戦士がフィールドに現れる。どう見ても機械族に見えるんだけど、それでも戦士族なのよね。

「さらに手札からジャンク・シンクロンを召喚し、モンスター効果発動！ 墓地に存在するレベル2以下のモンスターを効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚！」

「ああっ！？ 兄貴が負けた展開と同じだ」

今度はジャンク・ウオリアーに似た小さな茶色のモンスターが召喚される。翔君が叫んだ通り十代の敗因となったモンスターが召喚された流れとほとんど同じだった。

「出るか、スターダスト・ドラゴンっ!？」

「……そうね」

十代は拳を握り締めながら食い入るようにフィールドを見つめる。そうよね、あなたの大事なデッキを奪われたのだから。でも、私たちの予想は外れた。

「レベル5のジャンク・ウオリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！ 王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！ シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

丸藤翔君が召喚したのはスターダスト・ドラゴンではなく、悪魔のような赤いドラゴン。攻撃力3000の上級モンスターだった。

「スターダスト・ドラゴンじゃないっ!？」

「別のシンクロモンスターっすかつ!？」

「まだいたのね。しかも、攻撃力3000のモンスターがいきなり1ターン目から召喚されるなんて……」

それにきつとあの赤いドラゴン……レッド・デーモンズ・ドラゴンにも特殊な効果があるはず。あの子はどうやって切り抜けるのかしら? 私が気になってあの子を見ればシンクロ召喚なんて未知の召喚方法を使われたにも関わらず、ジッと静かに赤いドラゴンを見つめていた。

その様子にまたも言い知れないモヤモヤとした気持ちを抱く。なに、なんなのこの感じは。

「フハハハハハ、我は2枚カードを伏せターンエンドだ! 我の圧勝は決まりきっているが、サレンダーしてもよいのだぞ? まあ、貴様のデッキは当然貰うがな」

「誰がするか! 俺のターン、ドロー!」

抱いたよく分からない気持ちに私は戸惑う。もう、なんなのよ、この感じは！ 考えてもまったく分からないことに戸惑いから苛立ちに変わるも、デュエルはあの子のターンになった。

「俺は手札から暗黒界の龍神 グラファを墓地に捨てトレード・インを発動！ 俺は2枚ドロー！」

暗黒界？ 聞いたことのない言葉ね。でも、トレード・インは確かレベル8のモンスターを墓地に捨てることで2枚ドローするカードね。

「暗黒界デッキか。だが、グラファの攻撃力は2700。ダークゾーンを使ったところで我が何の対策もしていないとでも思っているのか？」

丸藤翔壱は知っているみたいね。暗黒界デッキと言うからにはシリズ物のようだけど。でも、丸藤翔壱が知っていて、私は知らないなんてなんか嫌ね。もっと広く勉強しなくちゃいけないかもしれないわね。

私が調べるのってほとんどがサイバーガール系列だから、それ以外だと試験で出るかもしれない範囲しか調べないのよね。

「さらに俺は手札抹殺を発動！」

「チイツ、ロード・シンクロンが……」

あら、また手札交換するみたいね。壁になるモンスターはいなかったのかしら？

「俺は5枚捨てて捨てた枚数ドロ！ さらに手札抹殺で捨てられたカードの効果を発動する！俺が捨てたのは暗黒界の龍神 グラファに暗黒界の武神 ゴルド。さらに暗黒界の軍神 シルバに暗黒界の狩人 ブラウ、暗黒界の術師 スノウ」

「2枚目のグラファだと！？」

えっ！？ 暗黒界って手札から捨てられると発動する効果だったの！？ あれ、でも、それだけだったらトレード・インで捨てた時にはなんで発動しなかったのかしら？ まだ、なにか条件がある……？

「なんだ、なんだ？　いったいどんな効果があるんだ？」

「十代、少し落ち着きなさい。すぐに彼が効果を言ってくれるんだから」

まったく。十代は忘れてるのかしら？　これはあなたのデッキを取り返すためのデュエルなのに、あの子が使うモンスターの効果にわくわくしちゃって、もう。そんな風に他愛もない話をしている間にもデュエルは進行していく。

「まずグラフアの効果。このカードがカードの効果によって墓地に捨てられた時、相手フィールド上に存在するカードを破壊する。俺は……俺から見て右の伏せカードを破壊！」

「くっ、サイクロンが!？」

グラフアはフィールド上の破壊効果か……それに効果で捨てられた時、だからトレード・インだと発動しなかったわけね。

「あれ、確か最初にグラフアってモンスターを捨ててなかったっス

か？」

「あ、そうだよな。なんであの時使わなかったんだ？」

翔君と十代が揃って首を傾げている。仕方ないわね。

「彼に聞いてみないと実際は分からないけど、多分コストで捨てた場合は発動しないんじゃないかしら？　あくまで効果で捨てられる必要があるのよ。トレード・インは手札1枚をコストに発動するカードだから、多分正解だと思うわよ」

「へえ」

「さすがは明日香さんっスね」

アカデミアの過去問に似たような問題があったはずなのだけれど……よく受かったわね、2人とも。

「次に暗黒界の武神、軍神の効果。このカードがカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。そして、ブラウの効果はカードの効果で捨てられた時、1枚ドローだ！」

あの子のフィールドに金の斧を持った金色の骨の悪魔と銀の剣を持った銀色の骨の悪魔が召喚される。もう一つの効果はドローだった。やっぱり暗黒界というモンスター達は手札から効果で捨てられると何らかの特殊効果を発動するみたいね。

あのデッキに安易な手札破壊なんてしたらとんでもないことになるわね。

「スノウの効果は他のカードの効果で捨てられた時、デッキから暗黒界と名の付くカードを手札に持ってくる。俺がサーチするのは暗黒界の龍神 グラファだ！」

「3枚目だ、と!？」

フィールド破壊に蘇生、ドローにサーチって……捨てることさえできればモンスターだけでほとんど出来ちゃうじゃない。

「まだまだあ！ さらに俺は暗黒界の雷を発動！ 相手フィールド上に存在する伏せカードを破壊する！」

魔法カードにも暗黒界と付いているものもあるみたいね。スノウのサーチ範囲に入るだろうから、かなり臨機応変に対応できるわね。しかも、その魔法で破壊したのは聖なるバリア ミラー・フォースだった。

「そして、暗黒界の雷の効果！ このカードが伏せカードを破壊した時、手札からカード1枚を墓地に捨てなければならぬ！ 俺はグラファを捨てて、レッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊！」

「くっ！？」

普通ならデメリット効果でしかないのに、暗黒界のモンスターだったらメリットに早変わりする。攻撃力3000のモンスターがあっさり破壊されてしまったわ。恐ろしいわね、暗黒界というモンスター達は。

「す、すごいっす！ 上級モンスターをあつという間に倒しちゃったっすよ！」

「すげえ、あいつとデュエルするの楽しみになってきた」

十代はあの子とデュエルしたいと目を輝かせながら決着が付こうとしているデュエルを見ている。まだあの子は通常召喚していないからレベル4以下のモンスターを召喚できれば勝ちが決まる。手札が5枚もあれば事故を起こしていなければ召喚できるでしょ。

「さらに暗黒界の取引を発動。互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロし、その後手札を1枚捨てる。俺は暗黒界の尖兵ページを捨て、ページの効果発動！ このカードが他のカードの効果で墓地に捨てられた時、フィールド上に特殊召喚する」

「これだから暗黒界はっ！？」

あの子がレベル4以下のモンスターを特殊召喚した。攻撃力は1600……レベル・ステイラーを簡単に破壊できる。これで勝ちが決まったわね。

「まだ終わりじゃないぞ。俺は墓地に存在する3枚のグラファの効果を発動！ フィールド上に存在する暗黒界の龍神 グラファ以外の暗黒界と名の付くモンスターを手札に戻すことでグラファを墓地から特殊召喚だ！」

なんですってっ！？ フィールド上のカードを破壊する効果以外に

自己蘇生持ちなんて……しかも、生贄ではなくて手札に戻すからノ
ーコストで攻撃力2700の上級モンスターが3体も並ぶなんて、
なんて悪夢かしら。

「おお、すつげえ。そんな効果まであるのか！」

「ぼ、僕……勝利君とはデュエルしなくなっただっス」

翔君、私もよ。

「さらに俺は暗黒界の門を発動！ 墓地の悪魔族1体を除外して手
札から悪魔族1体を捨てることができる。俺は暗黒界の導師 セル
リを捨て、セルリの効果発動！ このカードはカードの効果によっ
て捨てられた時、相手フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。
その前に門の効果で1枚ドロー！」

スノウを除外して丸藤翔吉のフィールドにマントを羽織った青い小
さな悪魔が特殊召喚される。わざわざ捨ててまで相手のフィールド
に特殊召喚するなんて……いったいどんな効果があるのかしら？

「な、なにしてるんすか、勝利君っ!？」

翔君が狼狽えてるけれど、見ていれば分かるはずだから口は挟まないでおく。それにしても暗黒界専用のフィールド魔法であるなんて……墓地のモンスターを除外する必要があるけど、捨てることで効果が発動する暗黒界を捨てる効果にドローまで出来るだなんて。それに墓地にモンスターがいくからコストにも困らないからとても無駄がない。

「さらにセルリの効果発動。このカードが暗黒界と名の付くカードの効果で特殊召喚が成功した時、相手は手札を1枚選択して捨てる。この場合の相手とは丸藤翔壱の相手……つまり俺となる」

おかしいわね。これならフィールド魔法で普通に捨てた方が相手にモンスターを渡さない分有利になるのに。

「俺が選択するのは暗黒界の魔神 レイン! このカードは相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠ゾーンにあるすべてのカードか、モンスターゾーンに存在するすべてのカードかを選択して発動する。俺が選択するのはモンスターゾーンだ!」

もしかしてレインというモンスターだけ相手に捨てさせる必要があるのかしら？ レインだけ相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時と、他とは違うみたいだし……レベルは7。扱いは難しいけど効果が使えれば中々に強力ね。

「さらに手札から陽気な葬儀屋を発動。手札にあるモンスターを3枚まで墓地に捨てることができる。俺は暗黒界の武神 ゴルドを捨て特殊召喚！ そして、暗黒界の門はフィールド上に存在する悪魔族モンスターの攻守を300ポイントアップさせる」

あの子、通常召喚を使わずにモンスターゾーンを特殊召喚だけで埋めてしまった。それも後攻1ターン目だけで……暗黒界だからなのか、あの子だからなのか……多分、両方ね。いくらカード1枚1枚が強力でも使うのはデュエリスト。使いこなしているからこそ、暗黒界のモンスター達は存分に力を発揮できているんだわ。

「グラフィア3体、レインとゴルドのダイレクトアタックだ！ 5体の合体攻撃、ダーク・ゲート・カーニバル！」

合計14400のダメージ……そして、10400のオーバーキル。その攻撃の苛烈さに丸藤翔壱は堪えきれずに吹っ飛んでいく。その時に十代のデッキが散らばってしまった。モンスター達が消えるとあの子は丁寧にカードを集め、他にカードが落ちてないか確認したあとあの子を睨んでいる丸藤翔壱に目を向けた。

「約束通り返してもらっからな」

「ぐ、クソっ！」

悔しそうに顔を背ける丸藤翔壱を見ずにあの子はまっすぐ十代に向かいデッキを差し出した。最初、私達はこの子が勝てるなんてあまり期待していなかった。この子が負けた時は私がデュエルで取り返す気でいたくらい。それが蓋を開けてみれば圧勝という結果が入っていたのだから驚きだ。

「すげえな、勝利！　そんでありがとな」

「こっちもムカついたからね。それに珍しく手がよかったからハシヤいでみたんだ……あ、そうだ。ハシヤいでちょいやりすぎちゃってすまん、翔」

「な、なんで勝利君が謝るのさ」

お礼を言う十代に彼は照れくさそうに頬を掻いて、翔君にやり過ぎたことを頭を下げて謝った。翔君の兄弟だから気分を害しただろうという配慮みただけで、翔君が慌ててしまっているわね。

「いや、だってあれお前の兄貴だろ。弟に謝るのは変じゃないと思うが？」

「そ、そうなのかな？」

この子、天然なのかしら？ なんの疑問も持たずに主張するものだから翔君が納得しかけてしまってる。でも、翔君は少し考えたあと大きく頭を振った。

「だけど今回は翔君兄さんが悪いんだし、勝利君が謝ることじゃないよ！」

「そう言ってくれると助かるかな」

翔君の言葉にふんわりと安堵するように頬を緩める姿に、あの理不尽なまでの効果でオーバークイルするような子には見えないから不思議

議よね。和やかな空気に私達が浸っているとカツカツカツと音が廊下から響いてきた。これは……まずいつ!?

「ガードマンが来たわ。夜間に出歩いた上に施設の利用がバレたら下手したら退学よ」

「うえっ!?! そうなのか?」

「あなた、生徒手帳を読んでないの? ちゃんと書いてあるわよ」

私がガードマンが来ることを告げると十代が驚いていた。もう、ちゃんと読みなさいよ。ふと横を見ると私を見て驚いているあの子があった。意外ね。この子ならちゃんと読んでも思ったんだけど……。

「君、いたの?」

「気付いてなかったのツ!?!」

あの子の口にした言葉に私は思わず声を荒げてしまったけど、そんなことをしている場合じゃなかったわ。私は十代達を連れてオベリスクブルーのデュエル場から脱出した。

無事に丸藤翔壺から十代のデッキを取り戻した俺は、何故かいたあの時の女の子に連れられて十代と翔の2人と一緒にガードマンに見つからないように逃げ出した。

「ふう、ここまで来たら安全ね。それにしてもあなた、丸藤翔壺に勝つなんてすごいじゃない」

「今回ののは偶然だよ。引きがとてもよかったから出来たことで……本来ならグラフィアで耐えながらキーカードが来るのを待つつもりだったからね。トレード・インで手札抹殺が引けて良かったよ」

女の子に褒められたけど、トレード・インで手札抹殺を引けて本当に運がよかった。レッド・デーモンズに殴り勝てるカードが来るか手札を捨てるカードとカーキがグラフィアが手札に揃うまで耐えるつもりだったし。

しかし、なんだ。女の子に褒められたのは初めてだけど、これは照れくさい。

「そうっす。兄貴を倒したモンスターじゃなかったっすけど、攻撃力3000のモンスターを倒したんすから」

俺が照れながら女の子と話していると、翔が興奮しながら喋る。ん？ 十代は違ったのか。

「そういえば十代はどんなモンスターにやられたんだ？ 俺とは違うみたいけど」

「白いドラゴンで、スターダスト・ドラゴンノバスターって名前だったな。勝利が破壊したレッド・デーモンズ・ドラゴンと攻撃力が同じだ。効果がそのモンスターを生贄にする事で魔法、畏、モンスターの効果が無効にして破壊してくるんだ。しかも、そのターンのエンドフェイズに自己蘇生する効果もあって手も足も出なかったぜ」

うわ、よりにもよってスターダスト・ドラゴンノバスターか。あれ、俺嫌いなんだよな。ゲームのCPUにしか使われたことないんだが、出された後は一方的にぼこられて終わったな。対処できるカードは入ってるけど1枚だけだから、中々引けずに攻撃力3000だから戦闘破壊は厳しい。暗黒界は素だと2700が最高だからな。

しかも、戦闘破壊したらスターダストが帰ってくるし、もう最悪。

「最悪だな。まあ、そいつが出てきてもあの手札ならどうにかなったか？ いや、手札抹殺が無効にされてたらちときつかったか下手したら負けてたな。レッド・デーモンズ・ドラゴンで良かったなあ、ほんとに」

いや、トレード・インの時に出てこなかったらまだ大丈夫だったか？ 暗黒界と割れても手札抹殺を使っちゃえばバスター・モードをチェインして連れてきても無効にされるのは恐らくグラファの破壊する効果だろうから除去したも同然だし……あとはあのまま攻め切れればどうにかなったな。

俺が色々とノバスターの攻略をあの手札状況で考えていると。

「ところでそろそろ帰った方がいいわよ。明日も授業があるんだから」

「え、あ、そうだな。えつと……」

女の子が帰った方がいいと言ってきたので同意したんだけど……女の子の名前を知らなかったため俺は口ごもった。

「天上院明日香よ。好きに呼んでくれていいわ」

「わかった。天上院さんと呼ばせてもらっわね、俺は高峰勝利。こっちも好きに呼んでくれていいよ」

俺が口ごもった理由を察した女の子……天上院さんが自己紹介してくれた。女の子の名前を呼ぶのは恥ずかしいから苗字呼びだけど、一応友達になったでいいのかな？ だったらいいな。

「私は勝利と名前で呼ばせてもらっわね」

「いいよ。俺は苗字呼びだけどいいよね？」

つと天上院さんにいきなり名前を呼ばれて恥ずかしくなるが、それを表に出すのも恥ずかしかったので、平静を一生懸命保って対応した。

「ええ、構わないわ」

「それじゃ、十代に翔。また明日な」

でも、それが長く続かないだろうことは自分の事だから当然で逃げるように帰る選択をする。まだ道を覚えてないのでPDAを操作して地図を呼び出す。

「おう、また明日な。約束忘れんなよ」

「おー。天上院さんもおやすみ」

「ええ、おやすみなさい。勝利」

「勝利君、また明日っスー」

十代から返事を貰い、天上院さんとも別れの挨拶を交わしたあと俺は心持ち早足でイエロー寮に帰り着いた。そのあと、初めての女の子の友達が出来たことにニヤケてしまい眠れず、翌日の授業中に寝てしまい先生に怒られてしまった。

TURN・03【アカデミアで出来た友達 後編】（後書き）

シンクロモンスターは十代とオリ主の敵限定で、オリ主に使わせる気はまったくありません。

敵と言っても今話の丸藤翔壱みたいな原作キャラを見下して私生活でも敵対しそうなキャラから、私生活は良好な関係でもデュエルの時は対戦相手という場合もあります。

使って欲しいシンクロモンスターかエクシーズモンスターが居ましたら感想で書いていただければ敵側の切り札として使わせます。ただし、勝敗についての文句は受け付けませんのであしからず。

あとオリジナルカードは無しでお願いします。

TURN・04【vs十代】（前書き）

感想で、オリカ有り・無しのタグが欲しいとありまして、読んでくれている皆さんに質問です。

作中にすでに『一本釣り』というオリカの存在があることを出してしまいました。

それでもデュエルでそういった作者の自作したオリカは出さないつもりです。出すとしても日常の1コマ程度です。

ですが、デュエルで使わないと言っても、その存在を作中で書いてしまったので『オリカ無し』のタグを使って本当にいいのかと軽い疑問があり、どっちを付けるべきか助言を貰いたいと思います。

感想無しでも、どっちにすべきかご意見がありましたら遠慮なく書いてください。

では、十代戦です。どうぞ。

TURN - 04【vs十代】

夜中のアンティデュエルから2日。表面的には平和な日々が流れる。デュエルについての座学に、体育、錬金術なんてものもあった。

錬金術の授業の後に大徳寺先生の猫、ファラオを抱かせてもらえたのが嬉しかったな。レッド寮が羨ましく思えたぞ。うちの寮も猫がいたらなあ。

ああ、そうだ。表面的にはと言った理由はあれからずっと丸藤翔壱に睨まれ続けているからだな。恐らく暗黒界デッキを使つて一気に潰したのを根に持つてるようだ。それか同類と気づかれたかのどちらかだ。

確かグラフィアのストラクチャーはこの世界の未来を舞台にしたアニメが始まった頃に発売したものだから。それで気付いても仕方ない。これからはデッキを複数持ち歩くかな……アイツにデュエルを挑まれた時を考えて。

アイツの性格からして暗黒界主軸のあのデッキに対するアンチデッキを組んでくるだろうし、弱点は割りと容易に想像つくからな。フィールド破壊系は暗黒界に依存してるから一度張られたらもう打つ手なしになるから確実に負けるだろうし。

そういや、主人公が誰かわかったな。丸藤翔壺から取り返した十代のデッキ……散らばったのを集めた時にE・HEROが目に入った。俺みたいな存在じゃない限りE・HEROを使う人物が主人公のはずだから。

これで十代がガツチャとか言ったらもう確定……疑いようもなく十代が主人公だろう。うーん、主人公に関わる気はなかったけど丸藤翔壺みたいなのがいるのを考えるとそれなりにアドバイスした方がいいか？

それに友達になったんだから見て見ぬフリは後味悪すぎだ。それに集めた時に見た感じだと基本的なカードしか入ってなかったからな。融合体なんてフレイム・ウィングマンとサンダー・ジャイアント、ランパートガンナーの3体しかいなかったし。いくらなんでも少なすぎる。

まあ、学校でパックを売ってるから徐々に増えてくんだらうけど……それだと丸藤翔壺みたいなのが現れた時なんかだと対応しきれないだらうな。

E・HEROがシンクロと互角に戦えるのも豊富な融合体を使った柔軟な戦術有ってこそ。3枚じゃあシンクロを使うデッキには力不足だ。俺や翔壺以外にはいないとは限らないんだし、俺みたいに味方なんて楽観視もできない。丸藤翔壺という前例があるんだから。

まあ、まだ十代が主人公だと確定したわけじゃないし気にかける程度でいいのかもしれないが。一応、欲しいか聞いてみるかな……余分にあるの見繕っておこう。あ、どうせなら面白い方がいいし、サブライズを仕掛けてから聞いてみるか。

今後の方針を決めた俺はイエロー寮の食堂で野菜中心に食べていた。肉はあんまり好きじゃないから全然苦ではない。太った原因はお米の食べ過ぎだしね。塩むすびって美味しいよね、異論は認めるが否定はさせない！

「おや、勝利。肉は食べないのかい？」

「大地か。いや、肉って言うてもレバーだよな、それ。レバーはちよつと……」

「ならこれはどうだい？」

話しかけてきた彼は三沢大地。入試で1位の成績を叩き出した人だ。気さくで人当たりもいい人物で入寮した翌日に親しくなった。そんな彼が差し出したのはソーセイジだった。

「あ、1本貰うね」

箸でつまみ上げてカリッと一口食べる。うん、美味しいかも……ちよっとクセがあるけど。

「それはレバーペーストと言って、ウサギの肝臓をすり潰してソーセージにしたものだよ」

「ゴホッ!？」

「だ、大丈夫かい？」

う、ウサギの肝臓っ!？ いや、名前からしてレバーの料理の一種みたいだから肝臓で間違っていないけど、ウサギっ!？

むせた俺は大地に背中をさすられて落ち着きを取り戻す。

「大地、ただレバーを使ったソーセージって説明だけでよかったんじゃないか？」

「そ、そうか？」

周囲を見れば件のソーセージを無言で皿に戻す生徒がちらちらという。うん、ウサギが材料ってびっくりするよね。こんな風に友人をどんどん作って充実した学校生活を送っている。

月一テストの一週間前の日曜日、俺はレッド寮にやってきていた。初日に十代と約束したデュエルをやり込んだ。しかし、レッド寮の印象は一言、アパートみたい。いや、実際にアパートなんだろうけど、イエロー寮と比べると……何も言っまい。

「おっ！ 勝利ー！」

「いらっしゃいっスー！」

翔と十代がレッド寮の2階から手を振っている。歓迎されるのってやっぱり嬉しい。手を振り返しながら寮まで歩いていくと、駆け下りてくる十代と翔は別段変じゃないが……。

「おはよう、勝利」

「え、あ、おはよう天上院さん」

なんで天上院さんもいるの？ それと後2人って……。

「あら、この坊やがあ坊やとデュエルするのね」

「そうよ、雪乃。紹介するわね。彼女が藤原雪乃で、この子は樋口桜よ。2人とも中等部からの友人なの」

薄紫色の髪をツインテールにしたのが藤原さん、赤に近い紫色の髪をカチューシャで止めているのが樋口さん。藤原さんはツリ目がちで勝ち気そうな女の子で、樋口さんはおっとりとした大人しめな女の子だった。

というか見たことがある……TFで戦えるデュエリストだ。学生服だったけど、この時代にいるんだ。まあ、TFの最初の舞台はGXだったはずだからいてもおかしくはないだろう、多分。

「藤原雪乃よ。よろしく、坊や」

「樋口桜です。よろしくお願いします」

「高峰勝利です。藤原さん、樋口さん、よろしくお願いします」

「あら、名前で呼んでも構わないわよ？」

画面越しだと特に何も思わなかったけど、生で見るとすごい。自分で自分の顔が赤くなってるのがわかる。

「いや、恥ずかしいから藤原さんで……」

「赤くなっちゃって可愛いわね、坊や」

クスクスと楽しそうに笑う藤原さんに、俺は居心地が悪くなる。天
上院さんはまたかという表情で藤原さんを見ていることからこれが
標準なんだろう、藤原さんの。樋口さんは大人しいが……って、寝
てるっ！？

「あ、桜。立ったまま寝るなんて器用ね。ほら、起きて」

「ふぁ……おはようございます、明日香さん」

「おはよ」

天上院さんが慣れた様子で樋口さんを起こす。藤原さんも特に気にしてないようでこれも日常なんだろう。そういえば十代が来ない。距離なんてそう離れてないはずなんだが……寮に視線を向ければ、天上院さんにそっくりな女の子が十代に話しかけていた。

「えっと、天上院さん。あの子は？」

「え？ あ、あの子何してるのよ。っと、あの子は私の双子の妹よ。名前は茜よ」

妹居たんだ。なんか引つかるけど、よく分かんないから大して重要じゃないな。

「茜っ！」

「え、お姉ちゃんっ!？」

天上院さん……う、どっちも天上院さんだけど。お姉さんの呼び声に妹さんは驚いたように振り向いた。あ、右耳付近の髪に白いリボンがある。今回に限りリボンで見分けがつかない。……まあ、他の部分で違いがあるけどさすがにその部分で判断するのは気が引ける。

どこの部分かって？ お姉さんと比べて妹さんは胸が控えめなんだ。さすがに女の子の胸でどっちか判別するなんてしたくない。が、間違えるのも失礼だし最終手段にしておこう。

「あなた、今日は用事があるって言ってたのにどうしてここに？
もしかしてここに来るのが用事だったの？」

「お姉ちゃんこそ、どうしてこんなところにいるのよ」

「十代と彼のデュエルを見に來ただけよ」

お姉さんの方の天上院さんが……って、もう心の中だけ名前呼びでいいや。ややこしい。明日香さんが茜さんに俺のことを話している。茜さんは俺のことを訝しげに見つめ……いや、睨んでくる。あれえ？ 俺、睨まれるようなことしたっけ？

「誰？」

「高峰勝利君。見ての通りライエローの生徒よ」

「ふん」

うん、なんか良い印象なさそうだ。俺は取り敢えずぺこりと頭を下
げると、十代の方に向かう。

「待ってたぜ、勝利。さっそくやろうぜ！」

「あ、うん。よろしく、十代」

ワクワクして待ちきれないと言わんばかりに笑顔で話しかけてきた。
もう、デュエルディスクにはデッキがセットされている。

「兄貴、応援してるっスよ！」

「おう！」

ん、ちょっと雑談してからと考えてたけど十代はもうやる気満々
だ。氣勢を削ぐのは気が引けるし、ギャラリーまでいるんだから待

たせるのも悪いな。俺と十代は寮の近くにある崖の下まで向かう。
ギャラリーは崖の上から観覧だ。

あ、十代に言っておかないと。

「十代！　今回、俺が使うのはあの夜のとは違うデツキだからな！」

「そうなのか？　まあ、なんでもいいや。デュエルだ！」

言わなくても大して変わらなかったかな、こりゃ。俺と十代は互いにデュエルディスクを構える。そして、示し合わせたように……。

『デュエル！』

互いに開始の合図を叫んだ。

ついに兄貴と勝利君のデュエルが始まったっス。

「俺から行くぜ！ ドロー！」

先行は兄貴みたいっス。それにしても勝利君のデッキはなんなのか気になるっス。

「俺はE・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚し、1枚伏せてターンエンドだ！」

「十代君頑張って！」

明日香さんの双子の妹の茜さんが兄貴に声援をかける。羨ましいっスよ、兄貴。

「じゃ、俺のターン、ドロー！ 俺はE・HERO フォレストマーンを守備表示で召喚」

「おおっ！ 知らないHEROだ！」

勝利君が召喚したのは緑色の肌にスキンヘッドのHEROだ。今回の勝利君のデッキは兄貴と同じHEROデッキみたいっす。

「さらに手札から融合を発動！ 手札のフェザーマンとバーストレディを融合！」

「来るか、フレイム・ウィングマンっ！」

「E・HERO ノヴァマスターを融合召喚！」

勝利君は赤いマントを羽織った赤と黄色の鎧を着たモンスターを召喚した。兄貴の予想は外れたみたいだけど、兄貴は勝利君が召喚したモンスターに目を輝かせてるっす。そんな僕も兄貴の気持ちがよくわかるっす。

「あれは……やっぱり」

「やっぱりって何がよ、茜」

「ん？ なんでもないよ、お姉ちゃん」

明日香さんと茜さんが何か話してるみたいっすけど、勝利君は戦闘するみたい。

「バトルだ！ ノヴァマスターでスパークマンを攻撃！ プロミネンス・ノヴァ！」

「くっ、スパークマンが破壊された時、リバーカード発動！ ヒーロー・シグナル！」

勝利君のモンスターが真っ赤な炎の球体を兄貴のスパークマンに投げつけ、スパークマンは爆散してしまった。けれど土煙を切り裂くようにシグナルが崖の岩壁に照らされる。

「自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時に発動することができる。自分の手札またはデッキからE・HEROという名のついたレベル4以下のモンスターを特殊召喚ができる。俺はバーストレディを特殊召喚だ」

「なら俺はノヴァマスターの効果を発動する。このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、デッキからカードを1枚ドローする！ 俺はメイン2でカードを1枚伏せてターンエンドだ」

勝利君の場には攻撃力2600の上級モンスターがいるのに対して
兄貴の場にはバーストレディだけ。最初のターンからピンチっス。

「あらあら、レッドの坊や。大丈夫かしらね」

「いきなり攻撃力2000オーバーのモンスターですからね」

「十代君なら大丈夫です！」

「確かに茜の言うとおり十代ならなんとかしそうね」

僕も茜さんと明日香さんに同意見っス。

「くっ、カッコいいな。勝利！」

「E・HEROの中じゃ、こいつが一番好きだからな。そう言うて
もらうと嬉しいよ」

「そっか。でも、勝たせてもらうからな！ 俺のターン、ドロー！
俺は融合を発動！ フィールドのバーストレディと手札のフェザ

「マンを融合！ 来い俺のマイフェイバリット、フレイム・ウィングマン！」

出たっス。兄貴のエースモンスター！ しかも、ここで出したということは……。

「さらにフィールド魔法、摩天楼スカイスクレイパーを発動！」

周囲の景色が高層ビルが立ち並ぶ風景に変わる。HEROが主役の舞台が整った。

「摩天楼スカイスクレイパーはE・HEROと名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象のモンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！ バトル！ フレイム・ウィングマンでノヴァマスターを攻撃！ スカイスクレイパーシュート！」

「甘いぞ、十代！ 俺はフレイム・ウィングマンの攻撃宣言時にリバーシカード発動！ 燃える闘志！ 発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターに装備する！」

燃える闘志っスカ？ 装備カードになる罫なんて珍しいっスね。どんな効果なんだろう？

「元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在する場合、装備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の倍になる！」

「えっと、2600の倍だから……5200っ!？」

ご、5200っスカ!？ フレイム・ウィングマンはスカイスクレイパーの効果で3100ポイント……元々よりも1000ポイントアップしてるから効果が適用されるっス。

「灼き尽くせ、ノヴァマスター！ エンシェント・ノヴァ！」

「ぐう、フレイム・ウィングマン!？ くっ、俺はハネクリボーを守備表示で召喚し、悪夢の屋気楼を発動してエンドだ」

兄貴のフレイム・ウィングマンがノヴァマスターが放った巨大な炎の弾に飲み込まれて破壊される。兄貴のライフは残り900……ハ

ネクリボーのおかげで1ターンだけ耐えられるけど、もう後がない。

「俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。墓地またはデッキから融合を1枚手札に加えることができる。俺は墓地から融合を回収する」

「この時、悪夢の蜃気楼の効果発動。俺は手札が4枚になるようにドローする」

「俺はノヴァマスターでハネクリボーに攻撃！」

勝利君のモンスターによってハネクリボーが破壊されたっす。フォレストマンの攻撃力は1000で兄貴のライフは900とハネクリボーが居なかったら負けてたっす。

「俺はノヴァマスターの効果でドローして……ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ 俺のスタンバイフェイズ時、悪夢の蜃気楼の効果。このカードの効果でドローした枚数分、俺は手札をランダムに捨てる！」

兄貴の手札が4枚も墓地に……。

「ここがレッドの坊やの正念場ね。何が残るか……」

「うっ、ドキドキですう」

「……十代君」

兄貴っ！

「残ったカードは……強欲な壺！俺は2枚ドローして、さらに天使の施しを発動！2枚捨てて、残った2枚を伏せてターンエンドだ！」

「ここでその2枚を引くか。どう出るか楽しみだ。俺のターン、ドロー！」

「悪夢の屋気楼の効果で4枚ドロー！」

「フォレストマンを攻撃表示にして、バトルだ！」

あれ、勝利君。手札が6枚もあるのにモンスターを出さないのはなんでっスか？

「変ね。イエローの坊や。手札は十分なのに何もしなかったわね」

「そうですね。なんででしょう?」

「うう、きっと十代君を舐めて手加減してるのよ!」

「茜。憶測だけで決めつけたら駄目よ。きっと何か考えがあるのよ」

勝利君は悪い人じゃないから兄貴を舐めて手加減するなんて有り得ないっすよ!

「案外、イエローの坊や……手札事故でも起こしたんじゃないかしらね?」

雪乃さんが何か言ってるっすけど、声が小さくて聞き取れなかったっす。そんなことより勝利君のモンスターが兄貴に攻撃をしようとしてる……兄貴!

「俺はノヴァマスターの攻撃に対してリバースカード発動! ヒー

ロー見参！ このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分の手札から相手はカードをランダムに1枚選択する。選択したカードがモンスターだった場合、自分フィールド上に特殊召喚をする……違う場合は選択されたカードを墓地に送る。さあ、選べ勝利！」

「俺が選ぶのは十代から見て右から2番目だ」

「よっしゃあ。勝利が選んだのはモンスターだ。俺はE・HEROバブルマンを攻撃表示で召喚だ！」

ああ、兄貴。攻撃表示だなんて……何を考えてるんスか。

「さらに俺はリバースカード発動！ バブル・シャッフルを発動！」

「なにっ！？」

「このカードはバブルマンがフィールド上に表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するバブルマン1体と相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。守備表示にしたバブルマン1体を生贄にし、E・HEROと名のついたモンスター1体を手札から特殊召喚する！」

だから兄貴はバブルマンを攻撃表示で召喚したんスね。

「俺が選択するのはノヴァマスターだ！　そして、バブルマンを生贄にし、手札からE・HERO　エッジマンを特殊召喚だ！」

「ここ確か……俺はメイン2で1枚伏せてターンエンドだ」

次のターン、エッジマンで勝利君のノヴァマスターを倒せるっス。

「レッドの坊や。やるじゃない……だけど、次のターンは手札がゼロから始めなくちゃいけないから」

「はい。高峰さんの伏せカードによって決まりますね」

うう、どっちもすごいっス。

「俺のターン、ドロー！　ここで俺は速攻魔法、非常食を発動！　悪夢の屋気楼を破壊し、俺はライフを1000ポイント回復する。これによって俺は手札を捨てなくてよくなる！」

兄貴が悪夢の屋気楼を破壊して、さらにライフを回復させる……さすがは兄貴っスよ。手札は2枚でもきつとなんとかしてくれるはずっス！

「そして俺はカードを1枚伏せて……天よりの宝札を発動！ 互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。俺の手札は0枚、よって6枚ドロー！」

「なっ、ここで最強の手札増強カードだって！？」

勝利君の手札は5枚……だから1枚のみのドロー。だけど、兄貴は6枚もドローした。この土壇場であんなカードを引くなんて兄貴はやっぱりすごいっス！

「行くぜ。俺はサイクロンを手札から発動！ 伏せカードを破壊！」

「次元幽閉がやられたか……」

次元幽閉？　なんか物騒な名前っスけど、聞いたことがないカード

っス。

「次元幽閉？」

あ、明日香さんも雪乃さんも、桜さんも首を傾げてるっス。僕だけ知らないカードじゃなかったみたいっスね。

「もう。みんな知らないの？ 次元幽閉は相手モンスターの攻撃宣言の時に発動できて、その攻撃モンスターを除外する畏カードだよ。炸裂装甲の除外するタイプだね」

「詳しいわね、茜」

「えへへ」

なるほどっス。ということは破壊しなかったら兄貴のエッジマンが除外されてたっスから……あ、危なかったじゃないっスかっ！？

「さらに俺は手札から融合を発動！ フィールドのエッジマンと手札のワイルドマンを融合！ 来い！ E・HERO ワイルドジャ

ギーマン！」

兄貴の場から金色のモンスター、エッジマンと浅黒い肌のアマゾンに住んでそうなモンスターが融合して、金色の鎧を頭と左腕、腰につけた浅黒い肌のモンスターが召喚された。攻撃力2600で勝利君のモンスターと並んだ！ しかも、勝利君のモンスターは守備表示で2100の守備力っす！

「さらに手札からクレイマンを召喚し、リバーズカード発動！ ミラクル・フュージョン！ 自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、E・HEROと名のついた融合モンスター1体を融合召喚扱いとして特殊召喚する。俺はフィールドのクレイマンと墓地のスパークマンを融合……来い、E・HERO サンダー・ジャイアント！」

「凄まじいな……フォレストマンを攻撃表示にしたのは失敗だったか」

勝利君には兄貴も言われたくないと思うッス。暗黒界のあの展開力に比べたら兄貴のはまだ優しい方っすよ。

「行くぞ、勝利！」

「おう、ドンと来いだ！」

「ワイルドジャギーマンでフォレストマンを攻撃！ インフィニティ・エッジ・スライサー！」

これで勝利君のライフは2400つス。サンダージャイアントで勝利君のモンスターを破壊すれば……。

「さらにワイルドジャギーマンのモンスター効果！ このカードは相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃する事ができる。ワイルドジャギーマンでノヴァマスターを攻撃！ インフィニティ・エッジ・スライサー！」

「くっ……」

「最後だ！ サンダー・ジャイアントで勝利にダイレクトアタック！ ボルティック・サンダー！」

勝利君のライフは2400……サンダー・ジャイアントの攻撃力も2400。ワイルドジャギーマンにあんな効果があったなんて知らなかったっス。電気のような光線が勝利君目掛けて走っていき……。

「ぐううううっ!？」

勝利君のライフは0になって、周囲にそびえ立っていたビル群は消え、兄貴のモンスターも消えたっす。

「なんて引きの強さ……ゾクゾクしちゃうわね」

「すごいですう」

「やったね、十代君!」

「あそこで逆転するなんて……やっぱり興味深いわね」

膝を付いた勝利君に兄貴は……。

「ガッチャ! 楽しいデュエルだったぜ、勝利!」

「……ああ、俺もだ」

一瞬、勝利君は呆けたように兄貴を見てたっすが、すぐに笑顔にな
って立ち上がった、僕らの方に兄貴と一緒に登ってきたっす。僕ら
の近くに来た時は兄貴が勝利君にお礼を言ってたけど、どうしたん
スかね？

TURN - 04【vs十代】（後書き）

十代戦でした。ちなみに十代vs明日香があつた覗き事件はもう解決してます。

主人公、イエロー生ですから。レッド生なら同じ寮ということと一緒に رفت んでしようけどね。

その場になかったら十代のことだからさっさと一人で行くでしょうし。こうなりました。

TURN・05【類似存在との初コンタクト】（前書き）

ついにタイトル通りに初コンタクトです。

ではでは。

TURN・05【類似存在との初コンタクト】

十代とデュエルを終えて俺は当の十代にカードを見せていた。もちろん、先ほど使った属性ヒーローだ。

「おお、どれもカッコいいな！」

「だろ？ その中でも俺のイチ押しはノヴァマスターだ。ドロー加速の効果もあるし、攻撃力も高いからな」

デュエル中に使った燃える闘志なんてコイツのために入れてるようなもんだしな。炎のヒーローが闘志を燃やして強大な敵を打倒する……特撮ヒーローみたいな展開に似てるしな。

「なあ、ほんとにいいのか？」

「ああ、余ってるからな。ただ、使いすぎは要注意な。特に使いすぎに注意なのはZEROだ」

俺は氷のE・HEROを見せる。E・HERO アブソルートZE

ROだ。このカードの効果は、このカード以外に水属性モンスターが存在すれば攻撃力が水属性モンスター1体につき500もアップする。元々の攻撃力が2500だから1体でもいれば3000となる。

この世界だとそれだけで強力なカードだが、もつとも恐るべき効果はフィールドから離れるだけで禁止カードに指定されているサンダー・ボルトと同じ効果が発揮されることだ。戦闘で破壊しても、エクストラデッキに戻しても、除外しても発動するのだから質が悪い。

ただ、破壊効果なのでスターダストに無効化されるが……俺や丸藤翔壱みたいな存在でない限り、このカードとE・HEROの展開力を考えれば負ける事はまずないだろう。まあ、パームミッションが相手ならカウンターで無効化されるだろうけど。ビートが好まれるこの世界じゃ、まず目にする事はないだろう。

「理由なんだが、E・HEROの展開力とZEROの効果が合わさると一方的なデュエルになるから……相手からしたら理不尽だと思われる」

「確かに一方的なのは俺も楽しくないからな」

「そうだろ？　ただ、あの時の夜みたいに負けたら大事なデッキが盗られるかもしれない時は躊躇するなよ？」

この世界の人達にとってデッキを構成するカードは何よりの宝らしいからな……まあ、例外もいるっちゃあいるが、基本的にそうだと俺は思っている。

「おう！」

十代が嬉しそうに俺が渡したE・HERO達をデッキケースにしま
う……あ、そうだ。

「それとなんだが、一応これも渡しとく」

「D・D・クロウ？」

「ああ。丸藤翔壱が十代に使ったモンスターの効果は、こいつなら
対処できるはずだからな。それに闇だからエスクリダオの素材にも
なるし」

このカードはE・HEROとは関係ないが、スターダストを排除す
るには打ってつけた。罫カードのロストとどっちがいいか迷ったけ
ど、E・HERO エスクリダオの素材にもなるこっちを選んだ。
闇のE・HEROってネクロダークマンを除くとみんな融合体だか

らな。

「お、サンキュ。こんなに貰っちゃってなんか悪いな」

「俺より十代に使ってもらった方がこいつらも嬉しいと思うしな」

なんせ元祖E・HERO使いだろうからな。十代がいなきゃE・HEROは生まれもしなかっただろうし、こいつらも喜ぶに違いない。喜ぶで思い出したが、GXからデュエルモンスターの精霊が物語に絡んでくるんだよな。主人公……十代にもいたはずだけど。うん、見当たらない。

見当たらないって事は俺には見る能力がないって事だな。こういうのは定番として先天的な能力だから諦めるしかないよなあ。まあ、あつたらあつたで厄介事が向こうからやってきそう予感がするし……うん、無くてよかったかも。

「うおおお、早く召喚してみてえ！　なあ、勝利。もう一度やらな
いか？」

「そうだね……じゃあ」

「ちょっといい？」

十代から嬉々としてデュエルを申し込まれたが、横から妹の方の天上院さん……茜さんが声をかけてきた。十代に用なのかと思い、俺は特に何の反応もしなかったが……。

「高峰君にちよつと聞きたいことがあるんだけど、十代君。高峰君を借りていい？」

「うーん、勝利ともう一回デュエルしたいんだけどなあ」

「そこをお願い！」

「まあ、茜がくれた天よりの宝札で勝利に勝つこと出来たからな。いいぜ。そんじゃ勝利、また後でな！」

どうやら俺に用があつたらしい。というかあの時の宝札つて茜さんが十代にあげたもののようだ。あれさえなかったら俺の勝ちだったからなあ。まあ、十代が原作主人公だって確信持ってたからいいけど。

「で、聞きたい事って何かな？」

ちよつと横道に逸れた意識を軌道修正して茜さんに問い掛けると、
思いも寄らない言葉が彼女の口から飛び出した。

「高峰君つて転生者よね？」

「は？」

え、転生者？ 特に死んだ記憶はないんだけど……というか転生ならどうやってカードとか持ち込むのだろうか？ って、よく考えなくても彼女がそういう存在だって事の裏付けになるよな。そうじゃなかったらこんな事普通は言い出さないし。

「言ってる意味がよく分かんないんだけど……自分が死んだ記憶なんてないし」

「とぼけるの？ 十代君以外でE・HEROを……しかも、漫画でしか出てきていない属性HEROを使ったのがいい証拠よ」

ああ、だからそんな自信満々で言ってるんだ。俺はてっきり十代がまだ手に入れてないだけかと思ってただけど……というかGXの漫画なんてあったんだ。

しかし、彼女をどう納得させよう。そういえば二次の小説とかだと俺みたいなのを、確か……そう、そうだ。トリッパーって言ったはずだ。

「いや、とぼけてないよ。ほんとに死んだ記憶がないんだ。まあ、君が納得できる答えとしたらトリッパーじゃないかな？」

「トリッパー？ ああっ！？ その可能性を失念してたわ」

うん、納得してくれたみたいだ。それはよかったんだが、こちらからも確認しなくちゃいけない。

「で、君は転生者なの？」

「……そうよ。通り魔に襲われた後に目が覚めたら赤ちゃんだったわ」

俺に人を見る目は……正直言っただけ、嘘は言っていないだろう、多分きつと。まあ、俺も非常識な体験してるし、転生も絶対に無いとは言えないんだよな。否定するんならそもそもなんで俺がここに

いるのかって話になるし。

「後知りたいたんだが、なんでわざわざ俺にそんなこと確認したんだ？ 普通は頭が残念な人だって思われるぞ。それに当たってたとしてもどうなるのか分からないだろうに……」

まあ、後はなんで正体……正体だよな？ 似た存在なら正体が容易に理解されるような軽率な行動に出た理由を聞く。少なくとも立場的に同類だろう丸藤翔壱を例に挙げれば……俺は絶対に近付きたくないし、きっと知られれば何かしら動きがあつて面倒な事になりそうだし。

「大丈夫よ。あの腐れ馬鹿と違って十代君に好意的だったもの」

「腐れ馬鹿？」

「丸藤翔壱よ。シンクロの無い世界で、非公式だけだとしてもあんな堂々と使うなんて馬鹿としか言えないでしょ」

あゝ、うん。そこは同意するよ。邪神とか時械神とか所持してる俺が言っても説得力の欠片もないけどな。ちょうどいい機会だし、聞いてみるか。

「聞きたいんだけど、俺や天上い……」

「あ、私の事は茜って名前でもいいわよ。お姉ちゃんもいるからややこしいし」

「いや、女の子を名前で呼ぶなんて気恥ずかしいからこのままで」

俺が呼び方の件で断れば、その理由にそういうものなのかとイマイチ納得できてない天上院茜さんに改めて聞く。

「俺や天上院さん、丸藤翔壱みたいな存在って他にもいるかな？」

まあ、いて欲しくないのが正直なところだけど。

「いるわよ。ただ、さすがに全員は把握してないわね。ちなみに全員が仲間ってわけじゃないから、そこは注意してね」

「どういふこと？」

俺が彼女の言葉に素直に疑問を口にすると、すごく嫌そうに顔をしかめる。

「それはね、丸藤翔壱みたいな周りを見下して女漁りが目的みたいなのがわんさかいるもの。十代君を……言い方が悪いけど主人公だからって理由で目の敵にするとかね」

「……わんさか？」

「うん、わんさか」

なんて悪夢。あんなのがわんさかいるのか、地獄だろ。十代に属性HERO渡して正解だったかもな。いや、それだけじゃ安心できないかもしれんが……。アカデミアに入学したの、早まったかもしれない。

それに十代も可哀想に。自分じゃどうにもならない事で目の敵にされるなんて、俺が当事者だったら勘弁して欲しい状況だ。

「私が把握してるので7人。どいつもこいつも人の胸を可哀想なものでも見るような目で……あゝ、腹が立つっ！」

「えっと……」

凄まじくコメントのし辛い事を……って、待てよ。これだと彼女、普通にバレバレ？

「も一つ質問。天上院さんって同じ立場の人間だって知られてるの？」

「当たり前じゃない。お姉ちゃん……天上院明日香には兄が一人いるだけよ。原作じゃ双子の妹なんていなかったんだから、いたらそれが転生者だって疑うのは当然でしょ」

「……そうだったかあ」

もしかしてこれが引かなかった原因か？ 多分、そうだな。俺が茜さんを見て何に引かなかったのか納得していると。

「ねえ、高峰君って原作知識どれくらいあるの？」

「一期までで、主人公がガツチャを決め台詞にE・HEROを使うこと。最後は三幻魔を主人公が倒すってくらいかな。ああ、あと敵

の一人が吸血鬼つくらいか？」

「……………それだけ？」

「うん、それだけ」

あれ、なんか茜さん……………すっごく微妙な顔してないか？ 俺、おか
しなこと言っていないはずだが……………。

「ほとんど知らないってことじゃない。穴あきだらけにもほどがあ
るわよ」

「いや、何年前だと思ってんだよ。見てたのなんて5、6年前だぞ」

「え？ まだ完結して半年しか経っていないはずだけど……………」

は？ なんだって？

「それはどういう……………」

「茜！ 帰るわよ」

「この話はまた今度ね。お姉ちゃんに呼ばれてるから、じゃ」

俺がどういう事が確認しようとするが、天上院明日香さんの茜さん
を呼ぶ声が出て、彼女は慌てて出て行ってしまう。半年って……最
低でも3年は経ってるはずだぞ。俺は一期までしか見てないから5、
6年って言うただけで。こういうことなんだ？

「お、話は終わったのか？」

「う、うん」

「それじゃあ、またやろうぜ！」

抱いた疑問の解答を考えようとするが、仮説は立てられてもそれが
答えとは限らないわけで……もう一度茜さんに聞く必要があるな。
うーん、女子に学校の用事以外で声をかけるなんて初めての事だか
ら、どう声をかければいいのかさっぱりだ。

とにかく彼女が一人になった時にでも声をかけよう。人に聞かせら
れる話じゃないからな。それから俺は十代とデュエルして1日を過
ごした。暗黒界を使って十代とは3勝3敗となかなかの戦績だった。
やっぱりZEROは厄介過ぎる。まあ、グラフアで先に破壊しちゃ
えば被害はあんまり無いから影響は少ないんだけど……さっそくあ

げたD・D・クロウにグラフィアを除外された時は困った。

まあ、除外対策に闇次元の解放入れてたからなんとかあったが。それにしても十代はフレイム・ウィングマンが好きだな。TORNA DOを融合召喚してからミラクル・フュージョンで出してくるし。

3敗の内2敗はフレイム・ウィングマンにトドメを刺されて終わった。またデュエルをしようと約束を交わして俺は自分の寮に戻った。

十代とデュエルしてから一週間……デュエルアカデミアに入学して初めての月一テストの日になった。まずは筆記試験があり、午後の実技試験が行われる。午前の筆記試験はデュエルの知識を試すテストと高校の基本科目を休み時間無しでやり通すものだった。

トイレの場合は教科一つ終わらせた時監督の先生に自己申告すれば行かせてもらえる。テストが途中の時に行くと、それまでやっていたテストはそこで回収される。カンニング対策だ……それだったら休み時間を作ってくれた方が助かるんだけだな。

かくいう俺は朝にばっちり行ったからテスト中に行かなくていい。

テストも順調だ。やや現国と数学が心配だが、大丈夫だろう。平均点は取れるはずだ。さて、テストに集中したいが気になってる事がある。それは十代が来ていないって事だ。テスト時間が後半分になってもやって来ない。

もしかしなくても寝坊したんだろうな。同室の翔は自分の席でぐーすか寝てるし。心配は心配だが、それで自分のテストが疎かになっちゃ本末転倒。きっちりしっかり書き終えないとな。

それから俺は順調にテストを処理していき、最後のデュエルに関するテストのラスト問題を書き終えペンを置く。と、ちょうどその時に教室のドアが開いて十代が知らないオシリスレッドの生徒と一緒に入ってきた。テストを裏にしてから軽く……監督の大徳寺先生に気付かれないように周囲を見渡せば、空席が2つあった。

一つは十代の席としてもう一つはそのレッド生のものだろう。しかし、十代もそのレッド生も大丈夫か？ 周りを確認するついでに時間見たけど、後15分しかないぞ。それから少し……2分くらいしたら十代はいびきを掻いていた。……おい。

もう一人のレッド生はかなりの速さで腕を動かしていて、短い時間で数をこなそうとしていた……十代、彼を見習おうぜ。それから十代は……と十代に一度起こされていた翔も十代と一緒に試験が終わるまで眠っていた。さすがに試験中に起こしになど行けるわけがない。なので俺は試験が終わった後に声をかけた……大地と一緒に。

「おい、十代に翔。試験終わったぞ」

「ハッ!? やっちまったい……」

翔は起きた途端に涙を流し始める。泣くくらいなら意地でも起きてようよ。まあ、落ち込むだけいい方が……十代は。

「ま、なんとかなるだろ」

あっけらかんとして気にしていない。……はあ。

「ところでみんなはどこ行っただ？」

「ああ。みんななら購買に行っただよ。午後の実技のために、昼から新パックが発売されるみたいだからね」

「そうなのか、三沢」

「間違いないよ」

大地が十代の疑問にさらさらと答える。だからみんないないのか……新パック発売するなんて知らなかった。いや、みんなではないな。何人かはまだ教室に残ってる。茜さんに……十代と一緒に遅れてきたレッド生。後はブルー生徒がちらほらと……茜さんを除けばどいつもこいつも俺達を注視、ってもしかしてこいつら同類？

あ、十代主人公だった。もしかして、俺が忘れてるだけで原作であったのかこの場面……うわあ、だったら俺も同類だってバレたなこりゃ。まあ、いいや。こうなりゃ、毒を食らわば皿までだ。俺が読んでた二次だと、こういう場合目障りで排除か勧誘のどっちかだろうし、腹を括ろう。

……二次みたいに魔法やら小宇宙やら電気鼠みたいな能力者、いないといいなあ。そんな風に淡い希望を願っていると、どんな話をしていたのか。

「翔、勝利。見に行くぞ」

「うっす！」

「あ、うん。ってどこに？」

どこかに向かうみたいだった。つい同意しちゃったけど、慌てて場所を確認する。

「購買だよ。新しいカード見てみたいからな。勝利もそうだろ？」

あゝ、確かに気になる。それにどっちみち昼飯のために購買に行かなきゃいけないんだしな。

「当然行くよ。昼飯も買わなくちゃいけないからね」

「なら俺も行くこつ」

「おし、三沢もだな。じゃ、しゅっぱーっ！」

俺、大地、翔、十代の4人で購買に向かう。んゝ、今日は何を食べようか……昨日はチョココロネだったから、今日は焼そばパンとドローパン2個だな。今日こそは十代より先にタマゴパンを引き当ててやる！

結局、購買に行ったはいいがある生徒が新しいパックを買い占めてしまいたった1パックしかないと購買のお姉さんが申し訳なさそうにしていた。その最後のパックを十代は残念がる翔に譲ると言う。それに翔が感動していると購買のおばちゃんがやってきて新しいパックを1つ十代に差し出してきた。

2人は知り合いだったらしく、十代は何をしたのか。おばちゃんは2パックだけ残していてくれたようだ。1パックを十代に、もう1パックはもう一人の子にと言っていて俺や大地、翔は首を傾げたが……。

「天鳳院疾風って同じ寮の奴でさ。俺と同じく寝坊したみたいで、一緒にとめさんを手伝ったんだよ」

ああ、一緒に遅れてきたレッド生ね。なるほど。納得する俺達に十代は呑気にその天鳳院とデュエルしたいな、と言っていた。十代らしいちゃあらしい反応だ。それから俺達は昼飯を買って、晴れ晴れとした空の下で腹ごしらえを整えた。

結果から言おう。ドローパンはまたしても十代に引き負けた。俺が引いたのはキムチパンとメンチカツパン。いや、美味しいんだけど

ね、キムチも意外とパンに合うし。ちなみに翔はハバネロパンだった……ご愁傷様である。大地も付き合いでドローパンを買ったが中身が無かったのは予想外だった。

初めてのドローパンがそれだと可哀想だったので、メンチカツを半分にしてあげた。全部あげないのは逆側を俺がかじったからだ。そうして午後の試験の時間になるまで有意義な昼飯を過ごすのだった。

・
・
・
・
・
・
・

そして、実技試験。体育館で寮別に12人同時に試験をこなす。俺の番はまだなので、試合を見てみよう。

「大將軍 紫炎でダイレクトアタック！」

「うわあああああつ!？」

赤い戦鎧を着た武者を召喚して勝負を決めた。ピンク色の髪の勝ち気そうな女の子に……。

「フフ、イビリチュア・テトラオーグルでダイレクトアタック」

海獣みたいなモンスターでトドメを刺す藤原さん。六武にリチュアかあ。どっちも強力だよな……リチュアはTF6で初めて存在知ったけど、一応六武は持つてるからその恐ろしさはよくわかる。見た感じ六武の方は真六武は入ってないみたいだな。

まあ、真六武って確かシンクロが出てからだったから仕方ないか。リチュアはいつ出たのか知らないけど、儀式が中心だから元々あった可能性があるしな。

「僕はスーパービークロイド ジャンボドリルで守備表示のルイズに攻撃！ その瞬間、僕はリミッター解除を発動！」

「そ、そんなっ！？」

おおっ、翔は俺があげたモンスターを使って勝った。あげた甲斐があるってもんだ。よしよし。他はと見渡せば茜さんの姿が目に入っ

「クリツチーでローガーディアンを攻撃！」

「くっ！？ リバースカードオープン、リビングデットの呼び声！
オラは墓地から千年原人を召喚するっチ！ これでオラの勝ちっチ！」

確かに茜さんのライフは500。クリツチーが千年原人に破壊されたらそこで終わりだろう。ただ、茜さんが使ってるのは魔法使い族で手札が4枚ある。あのカードとモンスターがいれば……。

「甘いわね。私は速攻魔法、デモンション・マジックを発動するわ。自分フィールド上に存在するモンスター1体を生贄にし、手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚するわ。さらに特殊召喚した後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。私はブリザード・プリンセスを特殊召喚して千年原人を破壊」

「そんなあゝ」

「ブリザード・プリンセスでダイレクトアタック！」

無事に彼女は勝てたみたいだな。俺がフィールドから降りる彼女を見ていると、茜さんは俺が見ている事に気付いたのか笑顔で手を振

つてきた。それに俺が応えと……ゾクツと悪寒がして、その方向を見ればブルー男子にすごい睨みつけられていた。怖っ！？ いや、ブルー男子以外にイエロー男子からも睨まれ……うん、場所移動しよう。十代のところならまだ大丈夫だよな。

が、移動する前にとうとう俺の番になったらしく呼ばれた。対戦相手は……なっ！？

「ふん、この時を待っていたぞ。雑魚が」

「丸藤……翔吉」

そう。あのアンティデュエルの夜に十代のデッキを奪い、シンクロを使ってきた翔の兄であり……茜さん曰わく転生者の一人。こんな衆人環視の前で戦う事になろうとは。

だが、違う寮生同士で戦うのは俺だけじゃなかった。十代は万丈目とデュエルするらしく隣のフィールドに上がっていた。

「勝利、負けんなよ。俺も負けねえからよ」

と、不敵な笑み付きで話しかけてきた。クロノス先生がなんか言ってるが、勘弁して欲しい。なんか十代はイエロー昇格、俺はブルー昇格って話になってるが俺はブルーには上がりたくない。翔壱みたいな転生者が闊歩する魔窟になんぞに誰が喜んで引越すのか。

はあ。周りは盛り上がってるし、ここで俺が断ったらKYと思われて孤立しそうだな。いやだぞ、そんな真っ黒な学校生活なんて。それに嫌な理由はこいつ……翔壱相手に同じデッキで挑むことだ。絶対対策されてるから勝ち目が薄すぎる。今持ってるのは暗黒界と闇属性戦士族で固めたデッキ。

安定性で考えたら暗黒界だ。闇属戦士は結構安定性に欠ける。いや、まあ、それでも結構強いんだよね……回れば。速攻かスロースターか。まあ、答えは決まってるか。

「その話受けます。十代、そっちも負けるなよ」

「もちろんだ」

十代と少し話してからそれぞれのフィールドに向かい俺は翔壱と対峙する。ニヤニヤと気味悪く笑う姿にげんなりする。

「我に刃向かった愚かな雑魚にようやく罰を与える事ができる。大観衆の前で不様に地に這い蹲る様を見られると考えるだけで我が美顔が緩んで仕方ないわ」

美顔て……凄まじい自信だな。というかそれって弟の翔も美形って言ってるようなもんだぞ。チラリと翔を見れば水色の髪がちょこんと客席から覗くだけで本人の顔はしゃがんで見えなかった。恐らくこんな衆人環視で美顔なんて言われたから恥ずかしかったんだな。

まあ、同じ顔だしな。ツツコみはすまい。俺がなんと言おうと僻みや妬みと取られるだけなのは考えるまでもない。自分の事を俺は太ってて見苦しいと自覚している……その事で色々あったからな。

そんな苦い過去は忘れて、今はデュエルに集中しよう。翔壺が暗黒界に対してどんな対策をしてきたのか……ナチュル系だったら最悪だな。まあ、なるようになれだ。

「シニョール高峰とシニョール丸藤のデュエルを始めマスーノ。いいですーカ？」

「うむ」

「はい」

クロノス先生は俺達に確認した後、十代と万丈目の方も確認して頷き。

「でーハ、始めてくださいーノ！」

『デュエルっ！』

俺と十代、万丈目と翔吉は声を揃えてデュエルの開始の合図を叫んだ。

TURN・05【類似存在との初コンタクト】（後書き）

月一テストが始まります。次回はデュエル回です。

あと素朴な疑問が、他の作品覗いたけど、今日の最強カードとかや
った方がいいのだろうか？

TURN - 06 【華麗なる狩人】（前書き）

月一テスト。丸藤翔壱VS高峰勝利です。

どぞ。

TURN - 06 【華麗なる狩人】

『デュエルっ！』

ふん、よもや我が塵芥風情に頭を下げなければいかんとはな。甚だ度し難い。遊城十代ごときに敗北した塵芥にな。我が頭を下げなければならなくなった元凶には派手に不様に叩き潰してくれる。

「先行は我だ。ドロー！ 我は打ち出の小槌を発動。発動しているこのカードと手札を任意の枚数選択し、デッキに戻しシャッフルする。その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。我はこのカードと手札2枚を戻し3枚ドロー！」

だが、このカードを手に入れただけ塵芥に頭を下げただけはあ
る。よし、来たな。

「我は手札より次元の裂け目を発動。このカードが存在する限り墓地へ送られるモンスターは除外される。さらに我は異次元の生還者

を攻撃表示で召喚し、2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

くくく、奴のデッキは暗黒界。除外してしまえばなんら脅威ではない。対策のカードは入れているだろうが、我が伏せたのは封魔の呪印と魔宮の賄賂……どちらも裂け目を守るカードだ。

「俺は暗黒界の騎士　ズールを召喚し、暗黒界の門を発動！」

ほう、生還者を越えてきたか。この状況ならば門などダークゾーン
の劣化カードに過ぎない。が、悪魔のみを強化するため生還者の攻
撃力はズールに負ける。

「暗黒界の騎士ズールで生還者に攻撃！」

「裂け目の効果で生還者は除外される」

「……俺は2枚伏せてターンエンドだ」

「この時、除外された生還者を特殊召喚する。このカードは表側表
示で除外された場合、エンドフェイズ時にフィールドに特殊召喚さ

れる効果を持つ」

裂け目を使った定番のコンボだ。裂け目をどうにかしない限り我は生贄に困る事はない。さて、我のターンだ。

「ドロー。我は生還者を生贄に邪帝ガイウスを召喚。ガイウスの効果、このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在するカード1枚をゲームから除外する。我はズールを除外……この時、除外したカードが閻属性モンスターだった場合、相手ライフに1000のダメージを与える」

「くっ……」

「食らうがいい。我は邪帝ガイウスでダイレクトアタックだ！」

ガイウスは悪魔族、よって門の効果で3000攻撃力が上がって2700だ。効果ダメージと合わせて3700。圧倒的じゃないか我は。

「ガイウスの攻撃宣言にトラップ発動！ 炸裂装甲！」

「甘いわ、戯けが！ カウンタートラップ、魔宮の賄賂を発動！ 魔法・罫の発動を無効にし破壊する。効果適用後相手はカード1枚

「ドローするがな！」

「ぐう、　　っ!？」

ふん、男の悲鳴なんぞ耳が腐るだけが耐えられるのはつまらん。不様に情けない悲鳴を上げて我を楽しませる気概はないのか……実につまらん雑魚だ。

「エンドフェイズ、異次元の生還者を特殊召喚する」

「俺のターン、ドロー。俺は暗黒界の番兵レンジを守備表示で召喚し、1枚伏せてターンエンドだ」

「くっはっはっはっは！　どうしたどうした！　成す術無しか！　我のターン、ドロー！　我は生還者を生贄に光帝クライスを召喚。このカードが召喚、特殊召喚に成功した時フィールド上に存在するカード2枚まで破壊する事ができる。破壊されたカードのコントロールは、破壊された数だけドローできるがな」

本来ならこのターンで決めたかったが、前のターンで伏せられたカードは危険な気がする。万全を期すために……。

「我が破壊するのは伏せられたカード2枚だ！」

「くっ、俺はクライスの効果で2枚ドロー！」

あつたのはミラーフォースか。この選択は間違っていなかったようだな……だが、なんだ？ 奴のあの顔は……暗黒界の持ち味を封じられた癖に諦めていないだと？

ふざけおつて。貴様がしていいのはそんな胸糞悪くなる顔ではなく、我を怖れ絶望する顔だけだ。我の平静のために次のターンで絶対に潰す！

「我はガイウスでレンジを破壊しターンエンド。そして、生還者を特殊召喚だ」

我は奴の顔に苛立ちを覚えながら異次元の生還者の効果を発動した。

十代君は原作通りに万丈目君とデュエルするのはクロノス先生のパツク買い占めで予想できていたけど、高峰君があ馬鹿とデュエルするなんてね。

お姉ちゃんから聞いた話だけど、無駄にプライドの高いあ馬鹿の事だから根に持っていたんだわ。

「彼、もう駄目ね」

「明日香、本当にあの坊やが勝ったってほんとなの？」

「ええ。でも、彼の使っているモンスターは墓地に捨てられる事で効果を発揮するから。墓地を封じられてしまったとなると、ね」

お姉ちゃんと雪乃さんが話している。確かに暗黒界は墓地依存モンスターだ。除外されてしまえば能力は発揮できない。ゴルドやシルバ、レインも除外されてしまえば意味がない。あのフィールド魔法は知らないけど、主力は変わらないはず。

それに生贄を揃えようにも、ガイウスや生還者で破壊されてしまえば手の出しようがない。あ馬鹿に勝たれたらますます調子に乗るだろうから、高峰君に勝って欲しいけど。私だってあれを突破するのは難しい。あ馬鹿が光帝クライスの生贄にした生還者を特殊召喚した時、傾いていた秤が動いた瞬間だった。

「異次元の生還者が特殊召喚された時、手札からモンスター効果を発動！」

「な……に？」

クライスを召喚されてミラーフォースを破壊されたのはヒヤツとしたが、クライスのお陰で打開できるモンスターを引けたのは結果オーライだ。

「俺は闇の取引を捨てカオスハンターを特殊召喚する。このカードは相手がモンスターを特殊召喚した時に手札を1枚捨てることでこのカードを手札から特殊召喚する。さらにこのカードがフィールドに存在する限り相手はカードを除外できない！」

「攻撃力2500のモンスターを特殊召喚だと!？」

そうカオスハンターは攻撃力2500の悪魔族モンスター。門の効

果で2800となり同じ門の効果を受けたガイウスを超えた。

「そして、俺のターン、ドロー！」

引いたカードは手札抹殺……残りは暗黒界の雷とスノウ。あの伏せカードが気掛かりだな。

「俺は暗黒界の雷を発動し、相手フィールドに伏せられたカードを選択する」

「させるか。我は封魔の呪印を発動。手札の打ち出の小槌をコストに雷をこのデュエルで使用不可にする！」

雷を使って正解。破壊できたら御の字程度だったからな。本命は……。

「ならば手札抹殺を発動！ 手札抹殺で墓地に捨てられたスノウの効果！ 俺はデッキから……」

手札抹殺で引いたカードは暗黒界の取引……ならサーチするカードは。

「暗黒界の龍神 グラファだ！ そして、手札の暗黒界の取引を発動！ 1枚ドローして1枚捨てる。俺が捨てるのは当然グラファだ！」

「くそっ！？」

「グラファの効果で俺はガイウスを破壊！ さらに門の効果でスノウを除外し、取引で引いた暗黒界の狩人ブラウを捨て門の効果でドロー！ さらに捨てられたブラウの効果でもう1枚ドロー！」

引いたカードはベージと取引か……まずカオスハンターでクライスを破壊して400。ベージで生還者破壊して100、グラファでダイレクトアタックして3000。全部で3500のダメージだ。いかん、200足りない。こんな衆人環視の中でシンクロなんて使わないと思うが……もしもあるからな。このターンで決めるべきだ。となると召喚権は残しておいた方がいいだろうな。ゴールドとシルバが引ければ……よくてズールかブロンだな。

「俺はもう一度暗黒界の取引を発動……ドロー！」

来たのは暗黒界の騎士ズール。これなら、よし。

「俺は暗黒界の尖兵ベージを捨て、ベージの効果。このカードが他のカードの効果で墓地に捨てられた時フィールドに特殊召喚する。さらに墓地の暗黒界の龍神グラファの効果。暗黒界の龍神グラファ以外の暗黒界と名のついたモンスターを手札に戻す事でこのカードを特殊召喚する」

「くっ、だが、ベージを召喚しても私のライフは200残る。次のターンになれば……」

「このターンで終わりだ！俺は手札から暗黒界の騎士ズールを召喚！」

「な、なんだとおっ!？」

驚愕を露わにするあいつに俺はビシッと指を突きつける。どうせならトドメは逆転のキーカードでやるか。

「グラファで光帝クライスを、ズールで生還者を……カオスハンターでダイレクトアタック！カオスウィップ！」

名前が安直だろうと武器が鞭なんだから仕方がない。クライスはグラファのプレスで蒸発し、生還者はズールの剣に斬り捨てられ……カオスハンターの道を作る。その道をカオスハンターは身を低くして突破し、鞭を丸藤翔壺めがけて振り下ろす。地面が砕けるエファクトと共にアイツは膝をついた。

と、その時。

「フェザーマンでダイレクトアタックだ！ フェザーブレイク！」

「ぐあああああつ！？」

すぐ隣から十代の元気な声と万丈目の悲鳴が聞こえた。どうやらあつちも決着がついたみたいだ。こっちのデュエルに集中してどんなデュエルしてたのかさっぱりだ。それだけ危なかったんだから仕方ない。もしカオスハンターを引けていなかったらあのまま何も出来ずに終わっていた。

ソリッドビジョンがデュエル終了と共に消えていく。あゝ、これで俺には除外が有効だって知れ渡っちゃっただろうし、デッキをちよくちよく変えてしないといい力もだな。

そういえば大地が複数のデッキを運ぶのに良さそうなの持ってたな。どこで買えるか聞いてみよう。勝てた事に安堵しているとポンと肩を叩かれ、そっちを見ると。

「危なかったな、勝利」

「ああ、十代か。うん、マジで危なかった」

十代が笑顔で俺のすぐ横に立っていた。まあ、負けても不思議じゃなかったしなあ。この後、校長先生に俺と十代は揃って昇格と宣言された。いや、まあ、誉められるのは嬉しいんだけど、魔窟になんて行きたくないんだが……辞退できるか聞いてみよう、うん。

高峰君があゝの馬鹿に勝ったのはよかったけど、カオスハンター？
龍神グラフィア？ 私はあんなカード知らない。

『どうかしたの、茜ちゃん』

「ちょっとね……」

青い長髪の半透明な少女が話しかけてきた。彼女は私の精霊、憑依装着・エリア。高峰君と私を交互に見比べて不思議そうな顔をする。

『何かあの子で気になる事でも？』

「まあね。私の知らないモンスターだったから……」

『茜ちゃんが知らない？ え、ということ？』

エリアには私が転生者だって事を教えてある。それに生前でのこの世界についても。カードゲームの精霊であるエリアにとったらどうでもいいらしく軽く流されてしまって、もう忘れてると思っていたのだけど、この様子だと覚えていたみたいね。

「……全部のカードを知ってるわけじゃない。けど周りに暗黒界や悪魔族を使う友達がいたから、あのカテゴリーで知らないモンスターは少ないはずなんだけど……」

あんな強力な効果なら使わないはずないんだし……悪魔族使う友達
は女性型の悪魔族を集めるのも好きだったから、あの力オスハンタ
ーは絶対に手に入れようとするはず。自慢するのも好きだったから
私が知らないってのも変だ。

『茜ちゃん。あの子も茜ちゃんと同じなんだよね？』

「ちょっと違うけど、まあ、同じね」

『でも、あの子。茜ちゃんとは違う事言っただけだった？ 茜ちゃん
は半年って言っただけで、あの子は5、6年前だった』

そういえばそうね。あの時は気にしなかったけど、あれが本当なら
私が知らないカードを持ってもおかしくない。これは詳しく聞いた
方がいいわね。

同じブルーになる事だし、今日から入寮するだろうから後で聞きに
行こう。この時の私はそう疑わずに試験が終わった体育館を後にし
た……けれど。

「どついう事かな？」

「いや、どういう事って言われても……」

「どうして昇格を辞退するの？ 聞きたい事があったから男子寮の近くで待ってたのに、全然来ないんだもの」

ブルーの男子寮の寮長に声をかけられなかったら待ちぼうけよ。その時に寮長に注意もされたから散々だわ。

「丸藤翔壱と同じ寮はちょっと……。無駄にプライド高そうで、今日たたくさんの人前で倒したから恨まれてると思うし。寮内でも睨まれ続けるのは正直勘弁して欲しい」

あの馬鹿ならそうね。私だって悪意を持って睨まれ続けたら気疲れしちゃうわ。でも、それなら事前に教えて欲しかった。

「それに……天上院さんが前言ってたわんさかいる転生者。ほとんどブルーだよな？」

「ええ、そうよ。あれ？ 私、教えたっけ？」

「あゝ、今日の昼。俺、十代に話しかけてたでしょ。その時に教室に残ってたブルー男子数名に注目されてたから」

あの時ね。確かにあの時に教室に残ってたのは私を知る転生者ばかりだったわね。多分、朝十代君と遅れてきたレッド生も。

「もしかして、それが理由で辞退したの？」

「うん。十代と仲が良かったって知られてるし、邪魔な存在って事で何かされそうだからね」

確かにあの馬鹿共ならしでかしそうね。まあ、いいわ。私が彼と同じ立場なら同じ事してたでしょうし、本題に入らないと。

「辞退について理由は分かったからもう何も言わないわ。聞きたい事があったんだからそっち優先したいし」

「あ、そうだ。俺も聞きたい事があるんだった」

「そう？ でも、まず私からね。高峰君は原作を見たのが6年前ってホント？」

「うん、本当だよ。正確には一期を見たのが、だね。5D・sも最終回を迎えて新しい遊戯王のアニメがやってたと記憶してるよ」

つまり高峰君は私が生きていた頃よりも未来からやってきたのね。
まだ私が生きていた頃は5D・sが始まって半年しか経っていないから。これで私の知らないカードを持つて理由になるわね。なんせ私が亡くなった後の人なんだから。

「で、高峰君の聞きたい事ってなに？」

「天上院さんと同じだよ。半年しか経ってないって言うてたから」

『うんうん、普通は気になるよね』

うつさいエリア。つとここで私は気付いた。高峰君の真横にエリアがいるのに気付いた素振りなんてない……つまり高峰君には精霊を見る力がない事が。

『うん、茜ちゃんと同じだから見えると思ってたんだけどなあ』

エリアが高峰君の目の前に移動して何かしてるけど……見えないからってやめなさい。あなたのせいで私は高峰君が見えないんだから。

「どうかした？」

「うん、何でもない。気になる事も聞けたし、そろそろ戻らないといけないから、またね」

「うん、気をつけて」

『はい』

「またね、高峰君」

「うん、またね」

私はイエロー寮の近くの林から出て女子寮に戻る。林で話してたのは女子である私が男子寮であるイエロー寮に入ると何かと問題があるから。

ブルー男子寮の寮長に高峰君が昇格を辞退した事を聞いてPDAを使って呼び出した。聞きたい事も聞けたし、十代君の敵になる可能性もないだろうから安心かな。

『茜ちゃん、ご機嫌だね』

「そう?」

『うん。十代君とお喋りしてる次くらいに』

そこまでなのね。まあ、まともそうな人だからでしょうね。今まで会ってきた転生者はどれもいつも色情魔だったし……しかも、お姉ちゃんと私を間違えたかと思ったなら胸を見て納得するんじゃないわよ。

『あ、茜ちゃん。落ち着いて！ 顔が怖いよっ!?』

「あ、あら。ごめんね、エリア。他の奴らのこと思い出して、ム力ム力が……」

ふう、ダメね。前世に胸が小さかったから今でも引きずってるわ。

でも、前世よりは大きいのよ？ 前世なんてほんとに無かったんだから。今はCはあるもん……お姉ちゃんより小さいけどさ。

どうして双子なのに、大きさにこんなに差があるのかしら。私は自分の考えた事に落ち込んで、エリアに励まされながら寮に戻った。

TURN・06【華麗なる狩人】（後書き）

今回の翔壱のデッキは次元帝です。

暗黒界は墓地必須ですから誰でも思いつける対策ですね。まあ、誰でも思いつける故にそれに対する対策は仕込んでありますけど。

カオスハンターがそれになります。まあ、手札で腐る事が大半なんですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048y/>

遊戯王GX-お気楽小僧の決闘者生活-

2011年11月24日17時53分発行